●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 9－4

国際理解

目次

要　約　2

はじめに ……6

1．調査対象のプロフィール　7

- 調査対象 ……7
- 対象児の外国経験 ……7
- 外国志向と日本人意識 ……9

2．イメージの中の「外国」　12

- 「外国」と聞いて思いうかべる国 ……12
- 行ってみたい国・住みたい国 ……14
- 子どもが思う「外国のくらし」 ……18
- 子どもが思う「外国の子ども」 ……20

3．「国際化」がすすむ中で　23

- 国際化の現状認識 ……23
- 国際化に対する好意度 ……25
- 外国接触とその自信 ……27
- 外国の子どもへの接し方 ……29
- 日本に対する評価 ……32

4．外国接触と国際理解　33

- 国際化進展との関連 ……33
- 外国人の接し方との関連 ……38

まとめに代えて　40

地球社会の子どもたち ⑮
日本ーその2　昭和10年代の子どもの生活 ……深谷昌志……42

資料1　調査票見本 ……48

資料2　学年・性別集計表 ……57

※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

調査レポート
国際理解
要約

放送大学客員教授　深谷昌志
船橋市立大穴北小学校教諭　新井　誠

1．調査の目的

今の日本ほど、国際化という問題が取り上げられている国は世界でも例を見ない。そんな中で、子どもたちが「外国」や「国際化」をどのように受けとめているのか、明らかにしようとする。

2．外国経験

外国に行ったことがある子は5％で、23％の子は英語を習っている。（図1、図2）

3．外国志向と日本人意識

英語を習いたい子は「とても」「わりと」を含めて49％。外国へ旅行したい子は83％に達するが、住みたい子は59％である。

日本人でよかったという子は75％だが、学年が上がるにつれてへる。（図3～図6）

4．外国と聞いて思いうかべる国

男女・学年を問わず、外国と聞くと「アメリカ」を思いうかべる子が圧倒的に多い。（表１）

5．行ってみたい国・住みたい国

オーストラリア、フランス、スイスの人気が高く、特に女子にその傾向が強い。（図７～図10）

6．外国のくらしのイメージ

外国というとアメリカをイメージし、日本よりも「町の景色」や「住んでいる家」がよいと思っている。（図11、図12）

7．外国の子どものイメージ

外国の子どものほうが「サッカーがうまく」「足が速い」と思っているが、「お年寄りへの思いやり」は日本の子どものほうがあると思っている。（図13、図14）

8．国際化の現状認識と好意度

外国へ旅行する日本人や英語のできる日本人の増加、外国産の食べ物の進出に、子どもたちは日本の国際化を強く感じている。

英語のできる日本人の増加に対しては、７割の子がよいことだと思っているが、国際結婚の増加に対しては26％の子しか好意を示していない。（図17～図19）

要　約

9．日本での外国接触

外国の言葉の書いてある服を着たり、外国の映画やテレビを見たりすることはけっこうあるが、実際に外国人と接することは少ない。(図20)

10．外国人接触への自信

外国人と握手できる、外国のレストランで食事できる、外国の子と友だちになれるという子は、「たぶんできる」も含めて７割である。(図21)

11．外国人の転校生との接し方

外国人の転校生と仲よくしたくないという子が12%。仲よしの友だちと仲よしになったらいやという子が24%いる。(図22、図23)

12．日本に対する評価

日本は豊かな国だと思う子は８割を超える。一方、日本人は積極的に外国で仕事をしていないと思っている子は３分の２に達する。(図25)

●調査概要

1.調査主題　国際理解

2.調査視点　今の日本ほど、国際化という問題が取り上げられている国は世界でも例を見ない。そんな中で、子どもたちが「外国」や「国際化」をどのように受けとめているのかを探ってみたい。

3.調査項目　日本での外国接触、外国に対するイメージ、国際化の現状認識と好意度、外国の子どもとの接し方など。

13. 外国接触の多さと国際理解

外国接触の多い子は外国志向が強く、外国知識もあり、国際化の進展に好意を示している。そして、外国人の転校生にも積極的に交流を持とうとしている。(図26～図30、表２)

14. 外国接触の多い子

「父母と離れて旅行やキャンプに行ったことがある子」や性格が「明るい子」が、日本での外国接触が多い。(図31)

今後に向けて

日常、人・物・情報などで「外国」との接触が多い子ほど、日本の国際化の進展を好ましく思い、外国をよく理解し、外国人に対しても開放的な姿勢を示していた。

今、学校では国際理解教育の重要性が叫ばれているが、机上で外国知識を教えるだけでなく、実際に外国の文化・物・人と触れ合う活動が、積極的に学校教育の中に取り入れられることが望まれてならない。

4.調査時期　1988年６月

5.調査対象　千葉、埼玉、茨城の小学４・５・６年生

6.調査方法　学校通しによる質問紙調査

7.サンプル数　(人)

学年／性	男　子	女　子	計
4　年	296	272	568
5　年	285	236	521
6　年	326	309	635
計	907	817	1,724

はじめに

今、日本ではしばしば「国際化」という言葉が使われている。実際に、近年、世界のあらゆる国々や地域との人・物・情報の交流が盛んにすすめられている。日本人は海外にどっとくり出し、外国の言葉を気軽に使い、外国のファッションをすぐ取り入れ、外国の食べ物に舌つづみを打つ。一見うまく「国際化」しているようである。

しかし、筆者はアメリカ人の知人からこんなことを言われたことがある。「日本人は、英語がでかでかと書いてある服を着て、外国の音楽を聴いているのに、私たちが話しかけると逃げてしまう。どうしてなんでしょう」。また、彼は笑いながら「日本では〝国際化〟と言うことがよく言われているが、私たち外国人から言わせてもらえば、日本は〝国際化〟と言う前に〝人間化〟してほしい」とも言っていた。

「国際化」というのは、ともすれば人・物・情報などの交流と考えられがちだが、それだけでは本当の国際理解はできない。本当に理解しあう「真の国際化」とは、違う言葉や文化・生活習慣を持つ相手と、同じ社会の隣人としてつきあっていけるかどうかということなのではないだろうか。

そこで、子どもたちが外国や外国人をどのように理解しているのか、また、日本と外国との関係をどのように受けとめているのかを明らかにするとともに、それを通して、これからの国際理解教育に課せられた課題を少しでも探れればと考えている。

1. 調査対象のプロフィール

調査対象

本調査は、子どもの居住環境により、外国接触や外国観に差が出ると思われるので、調査対象を初めに紹介しておこうと思う。

今回は、首都圏近郊の千葉県船橋市、松戸市、埼玉県浦和市、茨城県水戸市の4地域7校を対象に調査を行った。

対象児の外国経験

子どもたちやその家族がどのくらい外国経験を持っているのか、まず明らかにしておこう。子ども自身やその家族が「外国に行ったことがあるか」を尋ねたのが図1である。

図が示すように、外国に住んでいた帰国子女が3％、旅行で行った子が1％、外国に行ったことがない子が95％である。大部分の子は外国経験がないが、その家族は半数近い44％が、外国に行った経験を持っている。今さらながらに外国が身近になったと感じる。

英語を習っている子は、全体で23％。学年を追うにしたがってふえ、6年生になると36％に達する（図2）。

図1　外国に行ったことがあるか

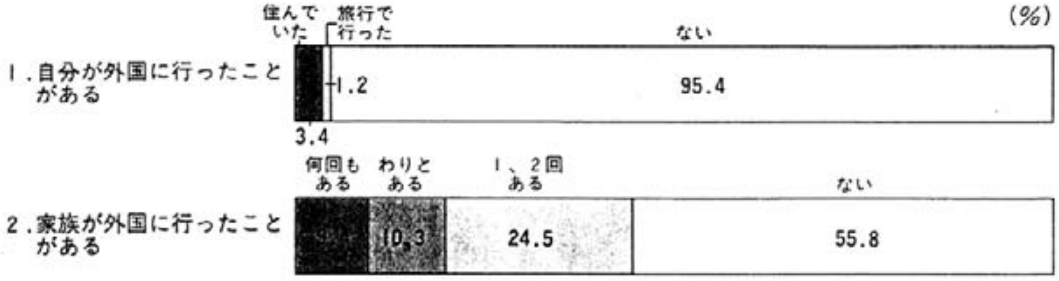
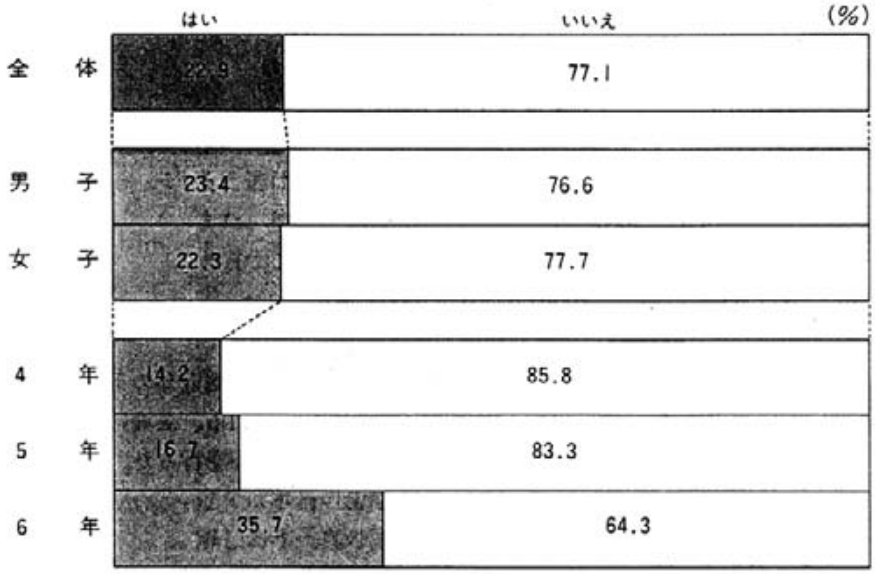


図2　英語を習っている子



外国志向と日本人意識

6年生になると3人に1人は英語を学習していたが、子どもたちはどのくらい英語を習いたいと思っているのだろうか。図3をみると、「とても・わりと思う」を合わせて、ほぼ半数の子が英語の学習をしたいと思っている。「ぜんぜん思わない」は16%足らずで、子どもたちは小学生のうちから英語の必要性を強く感じている。特に女子、6年生に、この傾向が強い。

英語を習いたい理由の1つに、外国に行ったときに言葉で不自由したくないからという答えが返ってきそうだが、次に、外国旅行や外国生活についての希望を尋ねてみたのが図4、図5である。外国旅行に行きたい子は8割を超え、4人に1人は1か月以上行きたいと答えている。外国に住みたいという子は、外国に行きたいという子よりはへるが、それでも59%もいる。10年からそれ以上という長期滞在希望者も1割ほどいる。

子どもたちはかなり熱い視線を外国に向けているが、図6は日本人に生まれてきてどう思っているかを尋ねたものである。図から明らかなように、外国に強い関心を持っているものの、やはり日本人でよかったという子が8割を超す。

図3　英語学習への希望

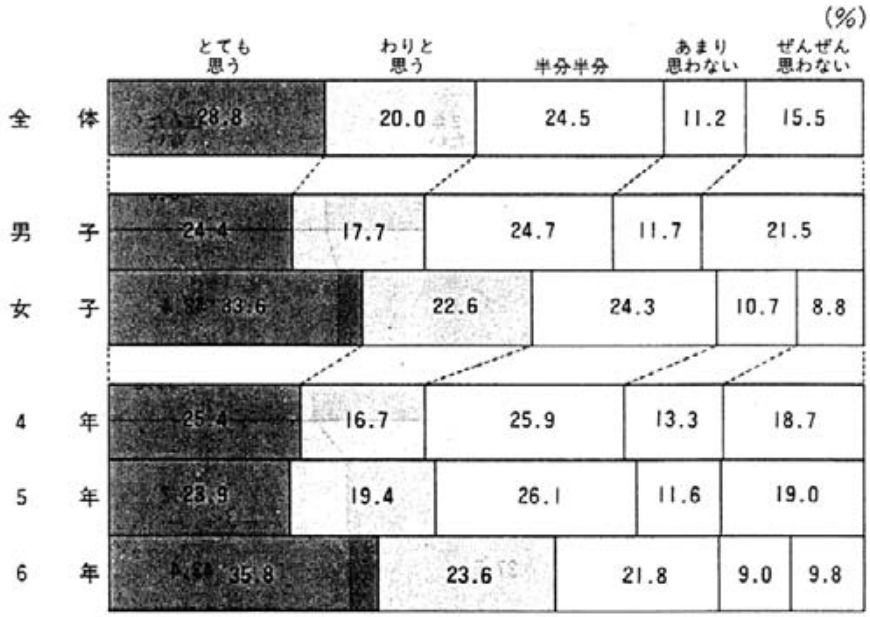


図4　外国旅行への希望

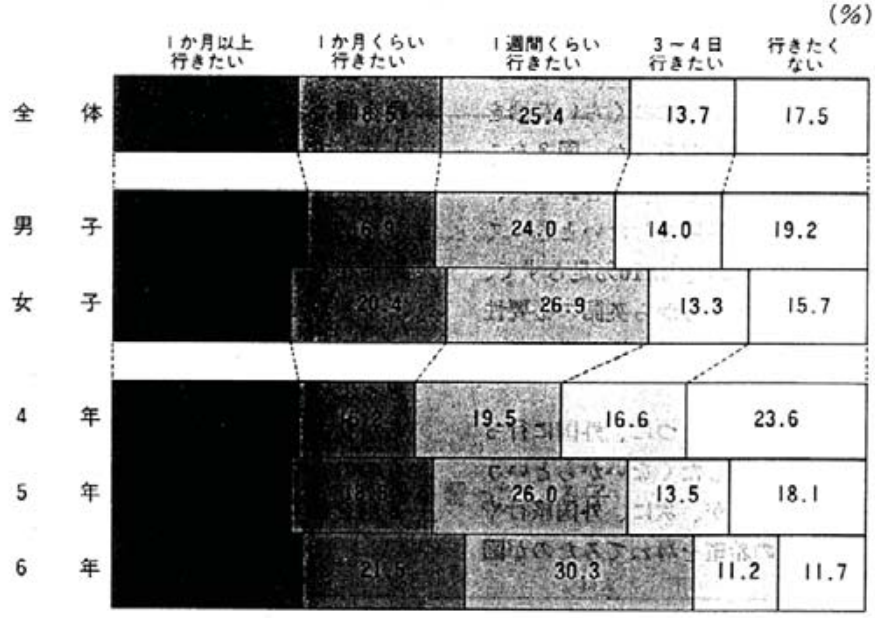


図5　外国生活への希望

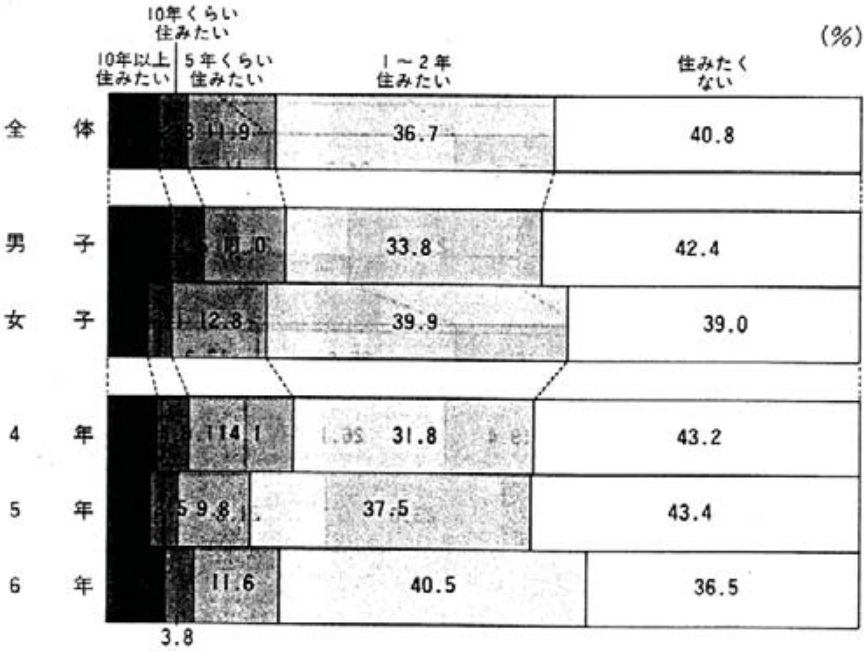
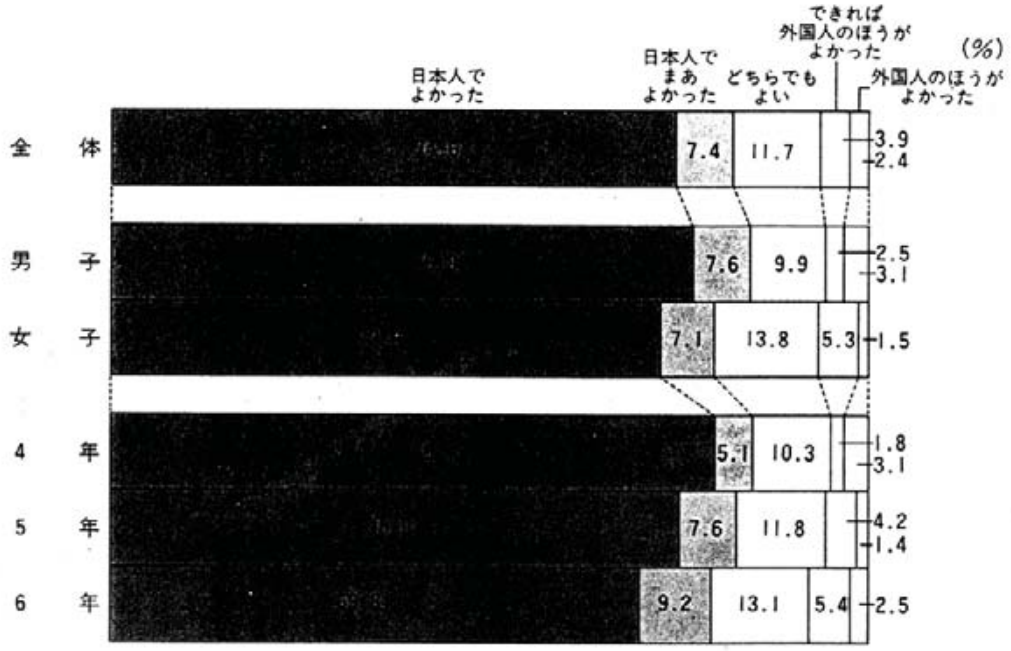


図6　日本人に生まれて


日本人で
よかった
日本人で
まあ
よかった
どちらでも
よい
できれば
外国人のほうが
よかった
外国人のほうが
よかった
(%)
全　体
男　子
女　子
4　年
5　年
6　年
7.4
11.7
3.9
2.4
7.6
9.9
2.5
3.1
7.1
13.8
5.3
1.5
5.1
10.3
1.8
3.1
7.6
11.8
4.2
1.4
9.2
13.1
5.4
2.5

2. イメージの中の「外国」

子どもたちは外国経験はないものの、かなり熱い視線を外国に向け、多くの子が外国に行きたいと思っていた。そこで、外国経験のない子どもたちが、外国のくらしや外国の子どもたちに対し、どんなイメージを抱いているのか、明らかにしてみたい。

「外国」と聞いて思いうかべる国

子どもたちは「外国」と聞くと、まず、どこの国のことを思いうかべるのだろう。一番初めに思いうかべた国を自由記述してもらった結果が**表1**である。まず思いうかぶ「外国」はアメリカだと3人に2人が答えている。男女・学年を問わず断然アメリカがトップで、以下のフランス、オーストラリア、中国は1割にも満たない。戦後から現在までの日本とアメリカの関係の強さを物語っているともいえる結果である。

表1　外国と聞いて思いうかべる国

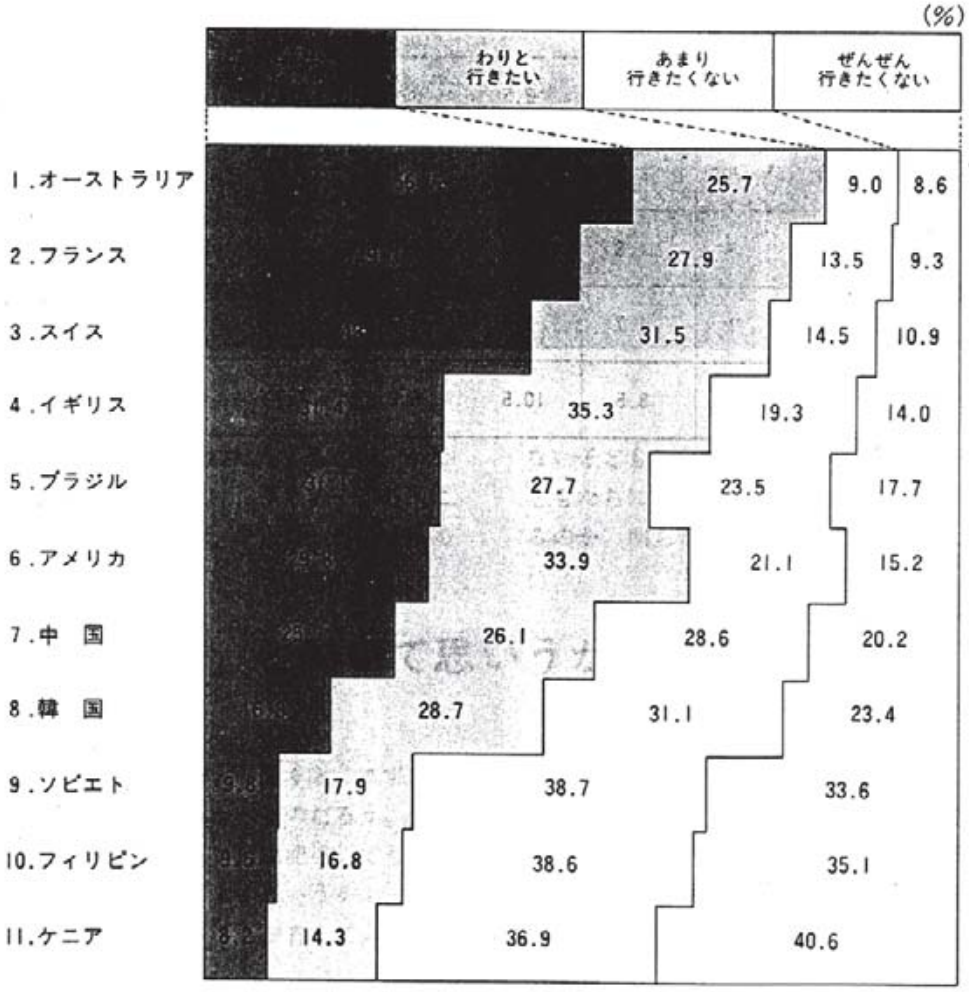
(%)

国名 ＼ 性・学年		全体	男子	女子	4年	5年	6年
1	アメリカ	67.0	65.1	69.1	67.2	69.6	64.5
2	フランス	6.6	5.5	7.7	7.7	5.1	6.7
3	オーストラリア	5.4	4.5	6.4	4.1	4.1	7.7
4	中国	4.1	5.4	2.7	6.6	3.3	2.6
5	イギリス	2.7	2.5	3.0	2.7	2.2	3.2
6	ブラジル	2.2	3.2	1.2	1.3	2.7	2.7
7	スイス	1.8	0.7	3.0	1.1	1.6	2.6
8	ドイツ	1.7	2.6	0.7	1.6	1.4	2.1
9	その他	8.5	10.5	6.2	7.7	10.0	7.9

行ってみたい国・住みたい国

8割以上の子が外国に行きたいと思っていたが、彼らはどこの国に行ってみたいと思っているのだろう。図7が示すように、一番行きたいと思っているのは、オーストラリア（82%）で、以下、フランス(77%)、スイス（75%)、イギリス(67%)と続く。全般に、風光明媚な西側先進国に人気があり、アフリカやアジア諸国、ソビエトは人気がない。

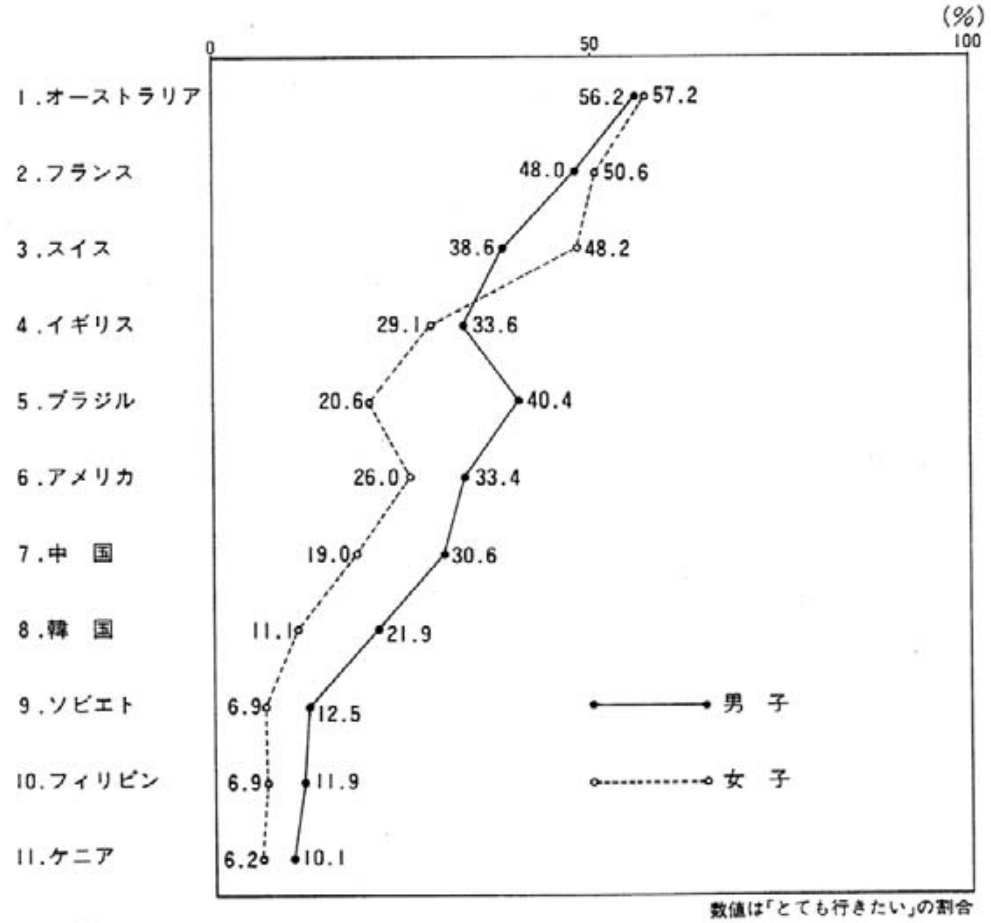
図7　行ってみたい国



さらに、図8で男女差についてもみてみると、女子に人気があるのはスイスで、その他の国に対しては、ほとんど同じか、男子のほうが行きたいという希望が強い。男女で最も差があるのがブラジルで、これは男子のサッカー人気によるものと思える。

次に、住んでみたい国について調べたのが、図9、図10である。住んでみたい国も、行きたい国と同様の傾向を示し、オーストラリア(68%)をトップに、以下、フランス(62%)、スイス(60%)、イギリス(52%)と続く。男女差についても同様で、行ってみたいと思っている国には、住んでもみたいということらしい。

図8　行ってみたい国×性



数値は「とても行きたい」の割合

図9　住んでみたい国

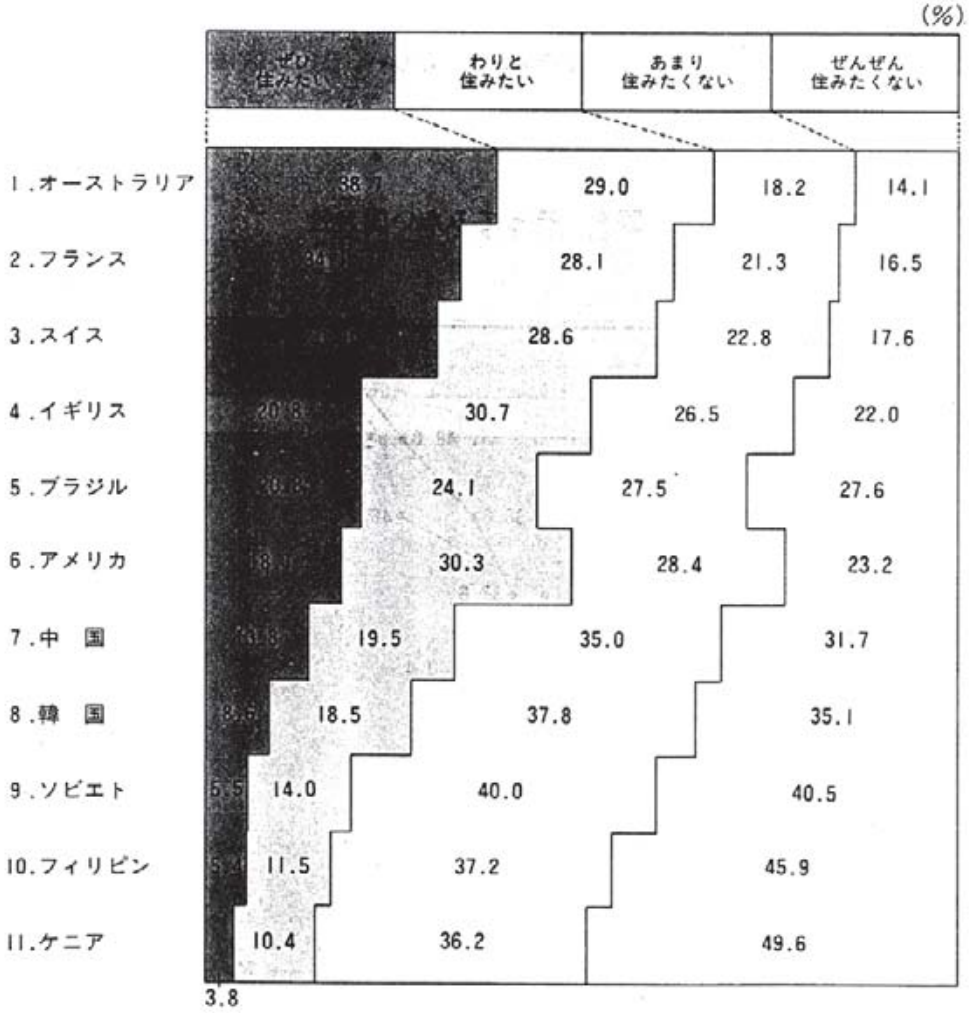
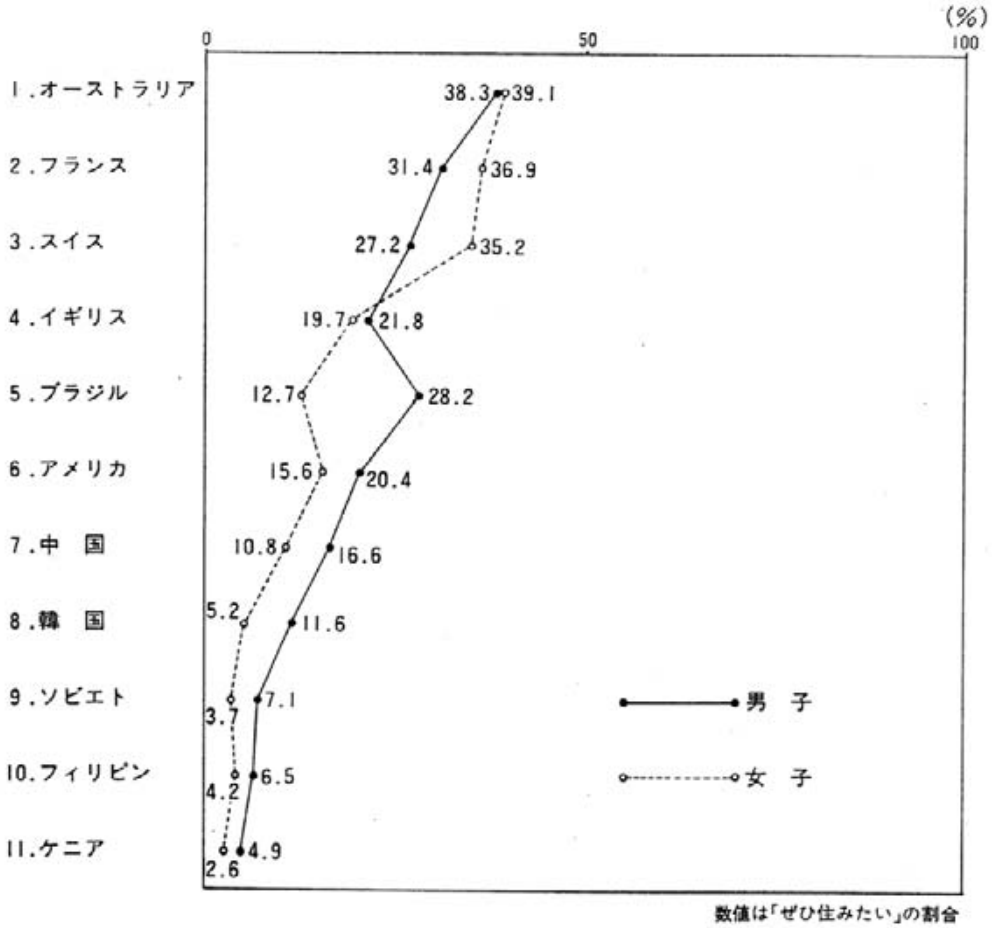

(%)
ぜひ住みたい
わりと住みたい
あまり住みたくない
ぜんぜん住みたくない
1.オーストラリア
38.7
29.0
18.2
14.1
2.フランス
28.1
21.3
16.5
3.スイス
28.6
22.8
17.6
4.イギリス
30.7
26.5
22.0
5.ブラジル
24.1
27.5
27.6
6.アメリカ
30.3
28.4
23.2
7.中　国
19.5
35.0
31.7
8.韓　国
18.5
37.8
35.1
9.ソビエト
14.0
40.0
40.5
10.フィリピン
11.5
37.2
45.9
11.ケニア
10.4
36.2
49.6
3.8

図10　住んでみたい国×性



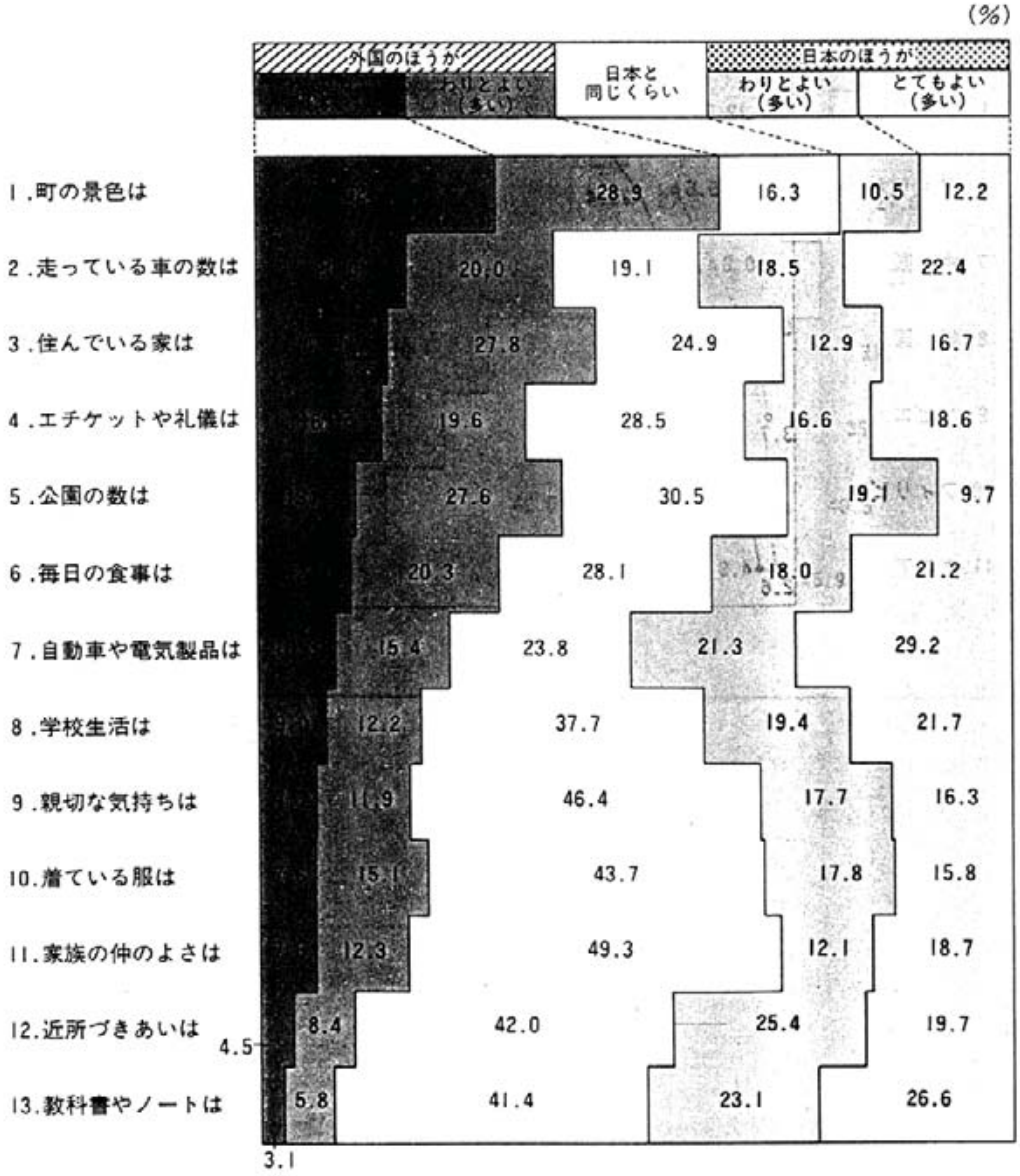
数値は「ぜひ住みたい」の割合

子どもが思う「外国のくらし」

子どもたちは、「外国」というとアメリカをイメージし、彼らの目は西側先進国に向けられていた。ここでは、彼らがイメージする外国（主に、アメリカに代表される西側先進国）のくらしと、日本のくらしを比較する中で、子どもが思う「外国のくらし」のイメージを探ってみた。

その結果が、図11である。ここでは、外国のほうが「とてもよい（多い）」という数値の高い順に整理してある。トップは「町の景

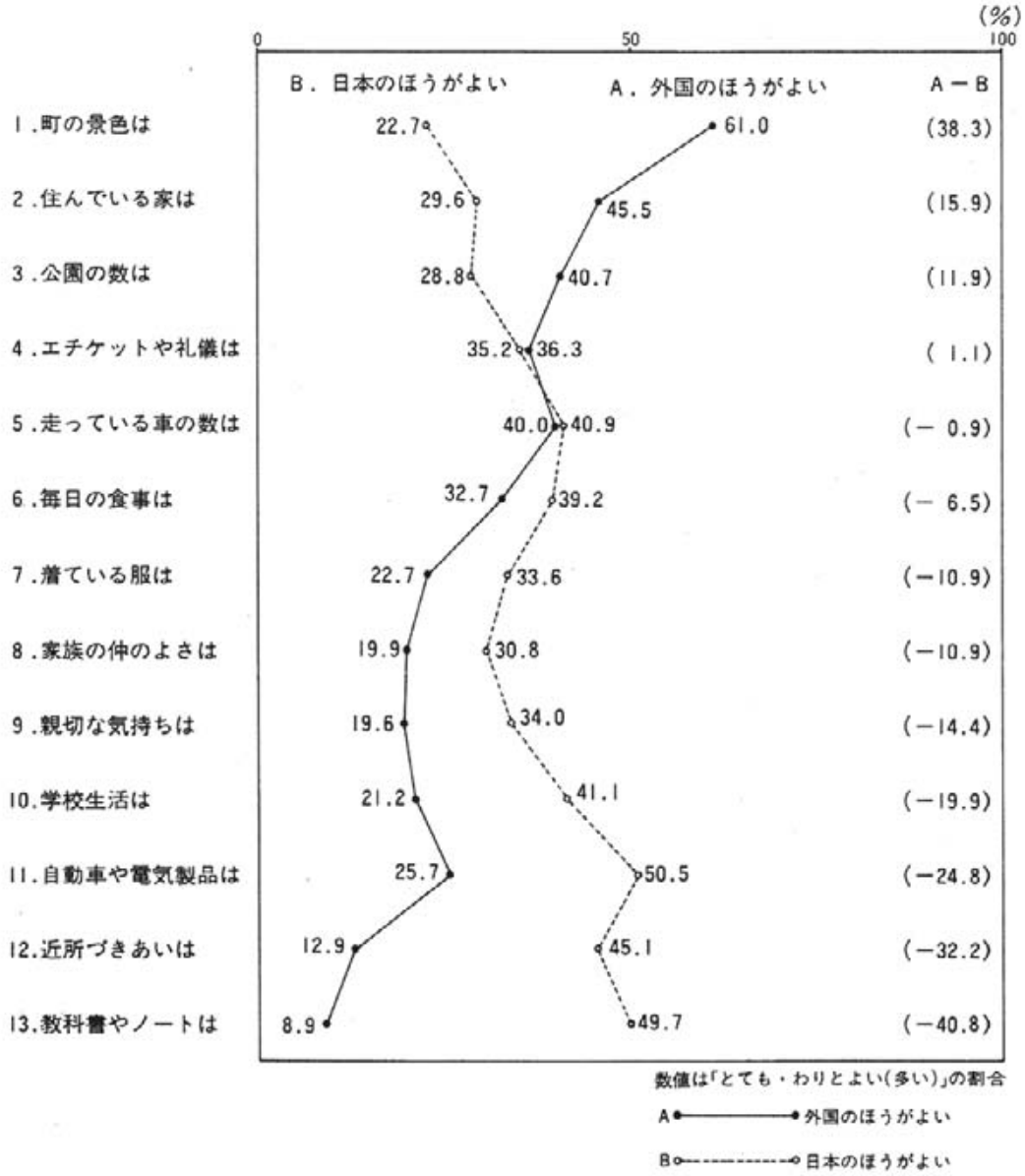
図11 「外国のくらし」のイメージ



色がとてもよい」の32%だが、次の「走っている車の数は」以下の項目の「とてもよい」の数値は低く、そのほとんどが1割前後である。では、日本のほうが「とてもよい」と思っているかというと、それほどでもなく、数値は1割～2割程度のものが多い。「日本と同じくらい」という数値が高い項目も目につくことをも考え合わせると、実際に外国に行ったことがなく、行った家族やテレビ、書物などの情報から外国をイメージする子どもたちは、アメリカに代表される西側先進国のくらしを、日本と同じか、ちょっと日本のほうがよいと思っていると解釈したほうがよさそうである。

ほんやりながらも、ちょっぴり日本のくらしのほうがよいと思っている子どもたちのイメージをもう少し明らかにしてみよう。図12は、図11の項目の「とても・わりとよい（多

図12　外国のくらしと日本のくらしの比較



い)」の数値を合わせて、外国と日本の比較をしたものである。

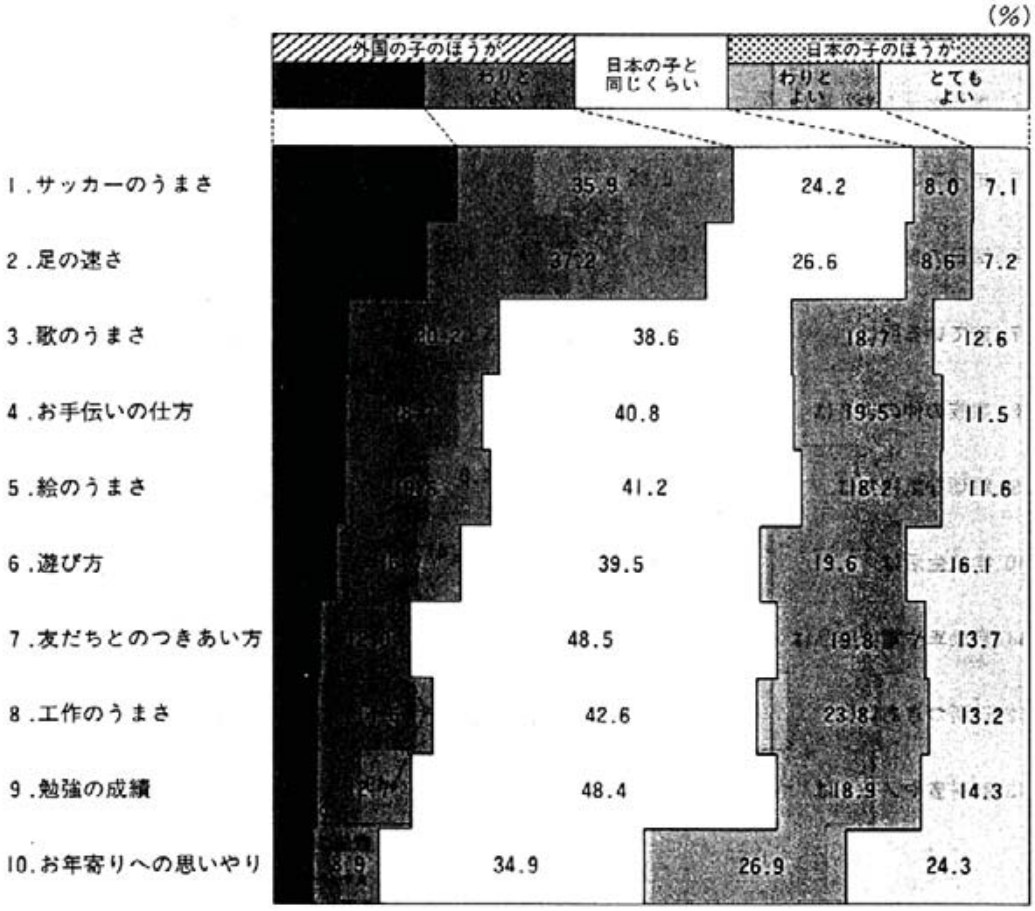
図をみると、子どもたちは「町の景色」「住んでいる家」は外国のほうがわりとよく、「公園の数」もわりと多いと思っている。日本のほうがわりとよいと思っているのは、13項目中8項目で、なかでも「教科書やノート」「近所づきあい」「自動車や電気製品」「学校生活」は、20%～40%の差がある。

子どもが思う「外国の子ども」

住宅事情や生活環境は外国のほうがよさそうだが、生活用品や人間関係は日本のほうがよさそうだとイメージしている子どもたちだが、外国の子どもたちに対しては、どんな「子ども像」を抱いているのだろう。

そこで、図13では、「サッカーのうまさ」以下の10項目について、外国の子どもと日本の子どもを比べて、どう思うか尋ねてみた。外国のくらしの場合と同様、「とてもよい」の数値は低く、はっきりとどちらがよいとは

図13 「外国の子」のイメージ



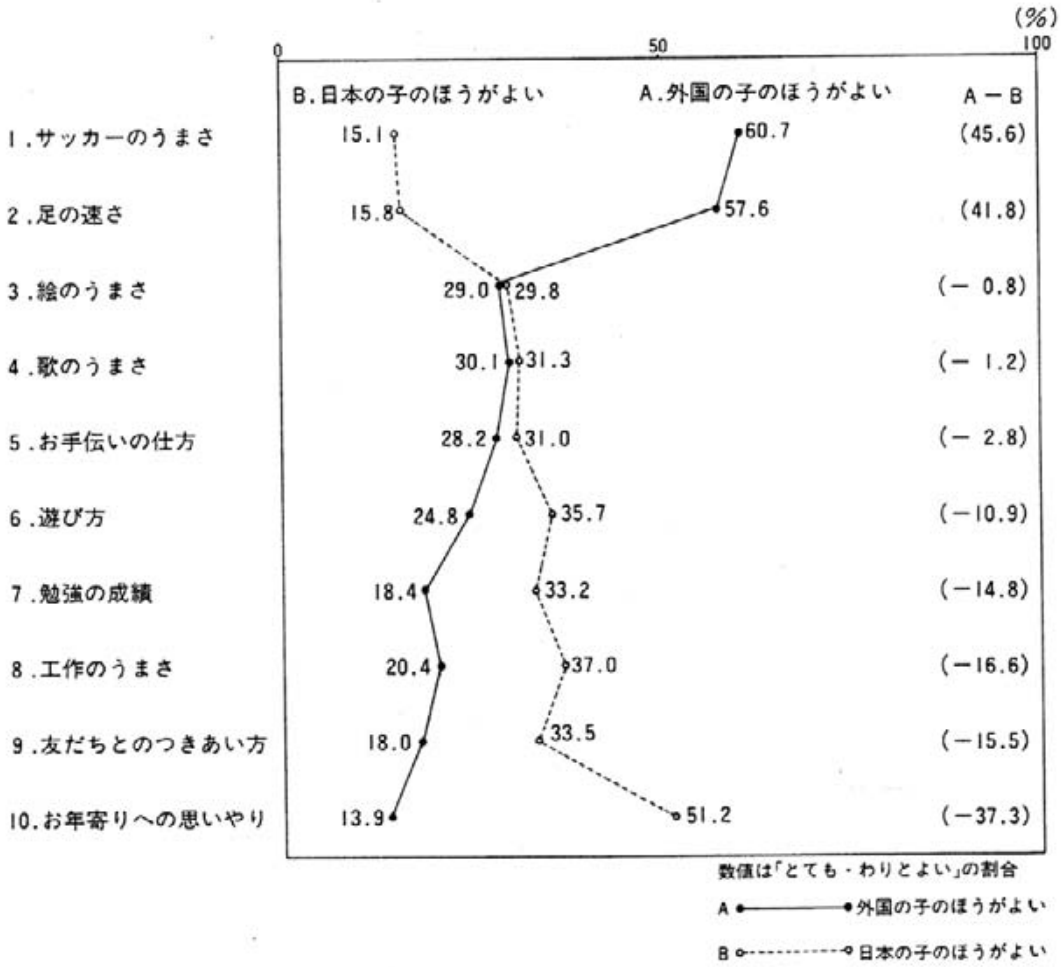
言いきれないようだが、図14をみると、日本の子どもがイメージする「外国の子ども」の姿が浮かび上がってくる。

外国の子は「サッカーがうまく」「足が速い」、しかし日本の子は、「お年寄りへの思いやりがあり」「友だちとのつきあい方がうまく」「工作が上手で」「勉強の成績もよい」と、運動以外の面では、日本の子のほうがよいと認識している。新聞などの投書欄で、お年寄りに席もゆずらない子のことが話題になり、現代っ子の思いやりの欠如を嘆く人がいるが、子どもたち自身は、外国の子よりもかなり自分たちのほうが「お年寄りへの思いやり」があると思っているのである。

さらに、子どものくらしぶりについても追ってみよう。外国の子どものくらしのイメージについてまとめたのが、図15、図16である。外国の子どものほうが「毎日の遊び時間」はちょっぴり多いが、「テレビを見る」「家庭学習」「読書」の時間は、日本の子のほうが多く、「仲よしの友だちの数」も多いと思っている。

実際に外国に行ったことがない子どもたちだが、テレビや書物などから外国の知識を得、「外国」について様々なイメージをふくらませている。しかし、子どもたちが目を向け、イメージしている外国とは、アメリカに代表される西側先進諸国で、アフリカやアジアへ

図14　外国の子と日本の子の比較



の関心は低い。

従来から日本は欧米のみに目が向いて、近隣諸国や開発途上国に対しては冷淡だと言われているが、近年、特にそういった国々との交流がふえ、日本企業が進出したり、逆に、留学生や出かせぎ労働者と言われる人々が日本にたくさん訪れるようになったりしている現在の状況を考えると、近隣諸国や開発途上国との国際交流や国際理解の必要性を感ぜずにはいられない。

図15 「外国の子どものくらし」のイメージ

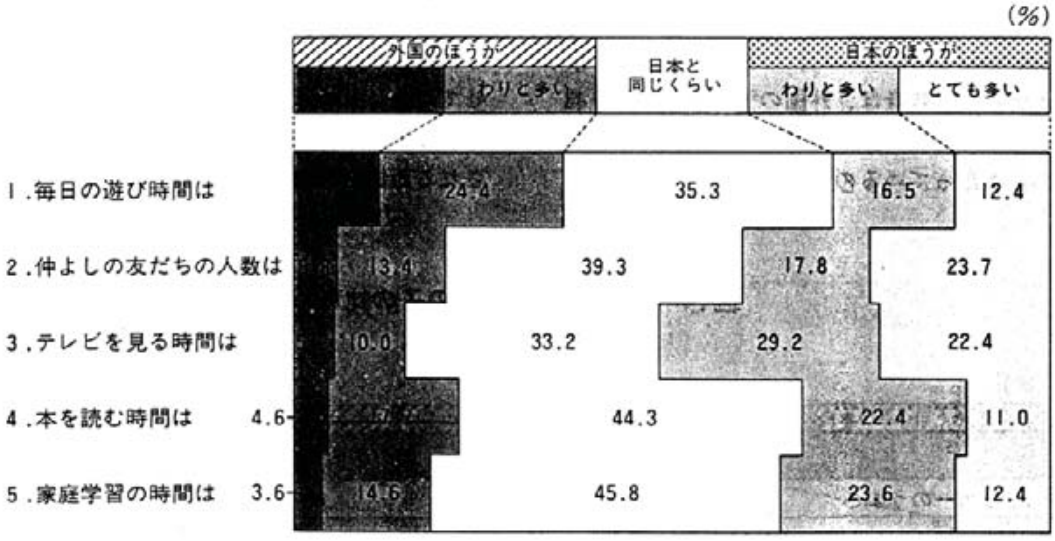
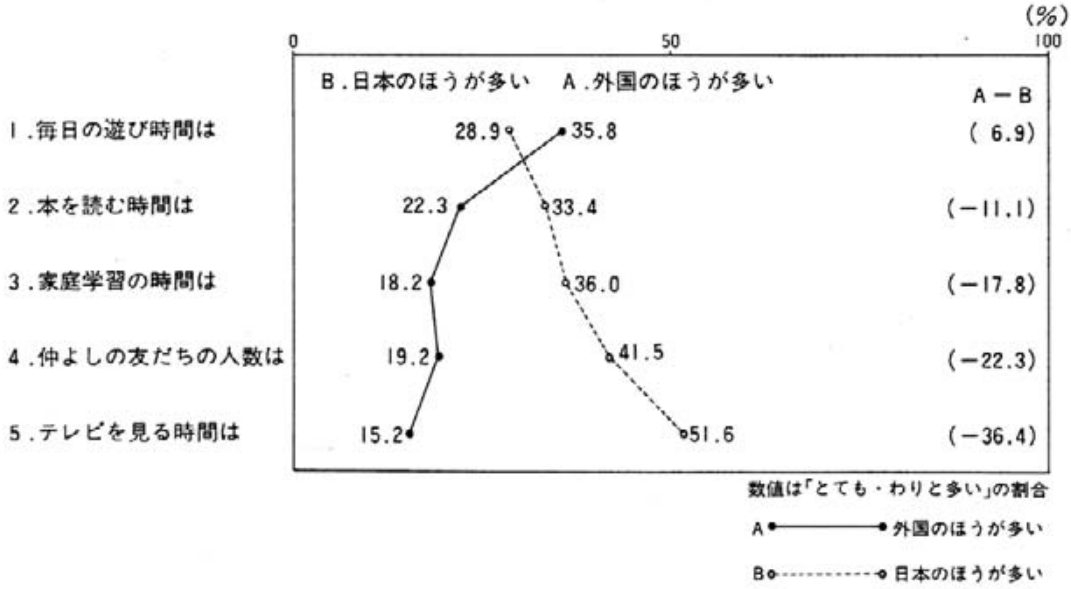


図16 外国の子どものくらしと日本の子どものくらしの比較



3.「国際化」がすすむ中で

前章では、子どもたちが心に描く「外国」の輪郭を明らかにしてきた。それでは、外国との交流がふえてきた日本を、子どもたちはどのように受けとめて生活しているのであろうか。本章では、国際化がすすむ日本に目を向け、子どもたちの心情や生活に接近してみたい。

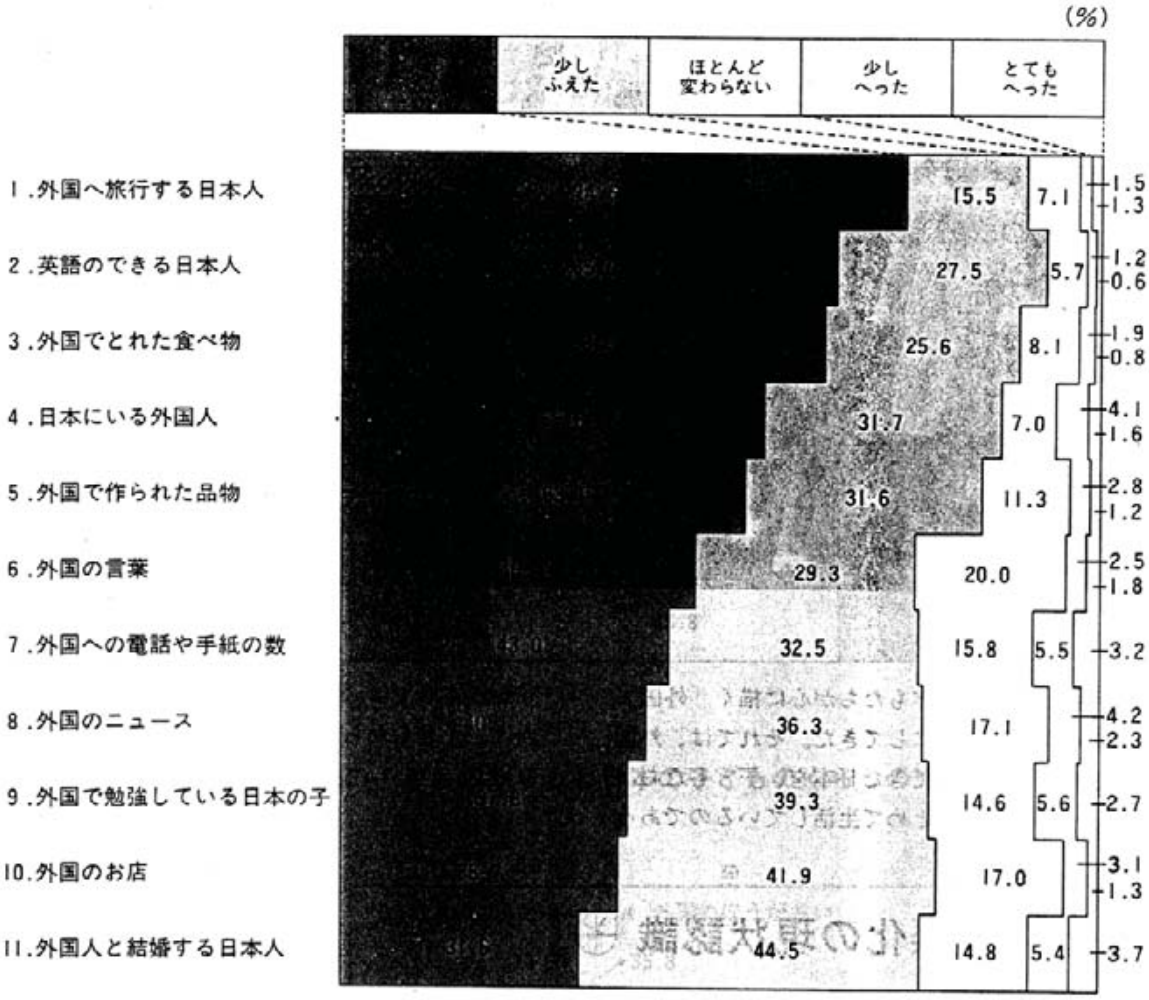
国際化の現状認識

まず、子どもたちが現在の国際化の状況をどのくらい認識しているのか調べてみたい。そこで、「外国へ旅行する日本人」以下11項目を用意し、「あなたのお父さんの子どもの頃と比べて、どのように変わったと思いますか」と尋ねてみた。その結果を掲げたのが、図17である。子どもたちが「とてもふえた」と感じていることで最も多いのは、「外国へ旅行する日本人」で75%、以下、「英語のできる日本人」「外国でとれた食べ物」が60%台で続く。ふえたとは感じていても、「とてもふえた」とまでは感じていないのは、「外国人と結婚する日本人」「外国のお店」「外国で勉強している日本の子」などで、数値は30%台である。

全体的にみると、大部分の子が日本の国際化がすすんでいることを感じているが、変化していないという子も1割～2割近くいる。お父さんの子どもの頃と比べてと質問しているので、単純に計算しても20年～30年前の日

本との比較なので、もっと「とてもふえた」の数値が高いと予想していたが、思った以上に子どもたちは変化を感じていなかった。

図17　国際化の現状認識

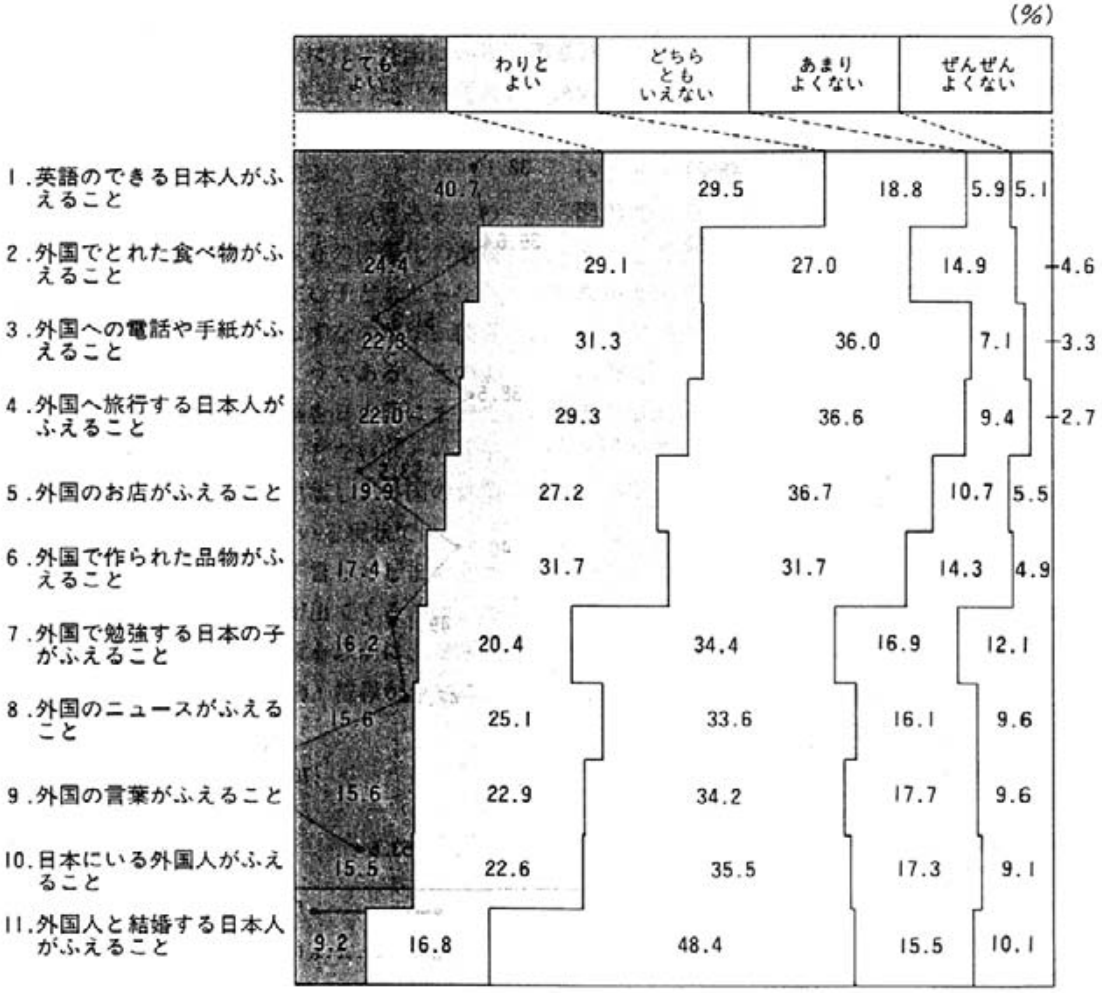


国際化に対する好意度

程度の差こそあれ、大部分の子は国際化がすすんでいることを感じていた。次に、同じ項目を用いて、子どもたちが今のように国際化がすすむことをどう思っているのか探ってみたい。

図18から明らかなように、国際化して「とてもよい」と感じているのは、「英語のできる日本人がふえること」で41%、「わりと」も含めると、7割の子どもが好ましいと思っている。しかし、その他の項目での「とてもよい」の数値は2割から1割台で、「わりと」を含めて、やっと4割から5割に達する。「どちらともいえない」という子も3分の1程度いる項目が多く、子どもたちは国際化を少

図18　国際化に対する好意度

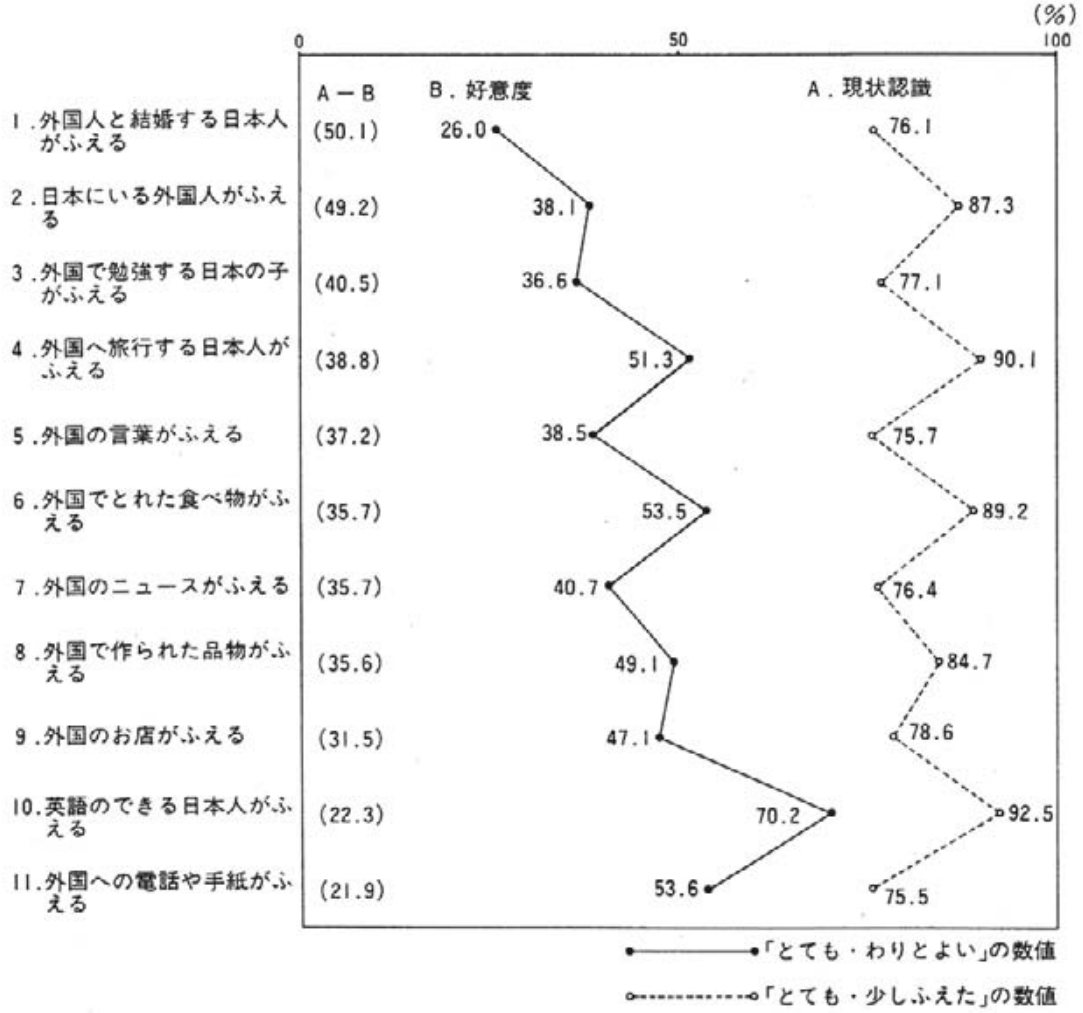


しは好ましく思っているものの、大歓迎ということでもないようである。

もう少し国際化の進展についての認識と、国際化に対する好意度の関係に接近してみよう。**図19**は、国際化の現状認識と好意度を比較したものである。全般的に、「お父さんの子ども時代と比べて増加した」と答えているものの割合が高ければ、「増加することは好ましい」と答えるという傾向がみられるが、全ての項目で「増加した」とする子の割合が「好ましい」とする子の割合を大きく上回っている。

図では、「増加した」と「好ましい」の数値の差が大きい順に整理してあるが、上位にあるのは、第1位が「外国人と結婚する日本人がふえる」で、差が50%もある。以下、「日本にいる外国人がふえる」「外国で勉強する日本の子がふえる」が続く。物や情報の増加に比べ、人の分野での国際化に対して、あまり好ましくないと感じていることがうかがえる。

図19　国際化の現状認識と好意度の比較



外国接触とその自信

今日、日本のあらゆる生活の中に、外国の言葉や物・情報・人が、私たちの好むと好まざるとにかかわらず入りこんできているが、その具体的外国接触状況をみていくことにしよう。

外国接触として図20にあげたように、今の日本で接触が可能と思われる12項目について調べてみた。図が示すように、トップは、「外国の言葉の書いてある服を着た」で、「しょっちゅう」と「わりと」を合わせると77%。その他、「外国の映画やテレビを見た」「外国でとれた食べ物を食べた」が7割を超え、上位にきている。一方、下位には「外国にいる人に電話をしたり、手紙を出した」「外国人と握手した」「外国人と話をした」など、人との接触に関する項目が並ぶ。

全体的にみると、「しょっちゅうある」の割合が低いものが多く、現在の国際化の進展から考え、首都圏近郊に住む子どもたちならもっと外国接触しているはずなのだが、彼らはそれを意識していないようである。そのよい例が、4の「外国の言葉を日本語にまぜて使った」である。「ほとんどない」という子が35%もいる。横文字が氾濫し、外国の言葉が日本語のように使われている現状では、「そんなはずはない」と思わず言ってしまいそうである。このような結果が出てくるのは、今、日本の国際化とわざわざ断る以前に、日常生活の中に、外国の文化や物・情報が多様に、継続的に入りこんできているために、どこまでが外国で、どこまでが日本か、子どもたち自身判断がつきかねることが少なくない状況になっているからではないかと思える。

すでにみてきたように、子どもたちは実際に外国人と接することは少なかった。頭の中へ外国の知識だけをつめこみ、外国の情報や物とだけの交流を盛んにしても、それだけで外国を理解することはできない。そこでくらしている様々な考えの人たちと互いに理解しあいながら、つきあっていけるということこそが、国際理解の最も重要なところである。

そこで、実際には外国人との接触は少ないのだが、それを「やればできる」と考えているのか。それとも「とうていできそうもないこと」と考えているのかをみてみたのが、図21である。全体としては、「ぜったいできる」と言いきる自信を子どもたちは持っていないようである。簡単な「外国人と握手する」でさえ、「ぜったいできる」と答える子は33%。「たぶんできる」を含めてやっと7割を超えるが、「たぶん・ぜったいできない」という子も2割強いる。

外国人との接触の少なさが、子どもたちの自信の乏しさにつながっていそうである。しかし、こんな子どもたちが外国に行って生活できるのだろうか。また、外国の子どもが、日本に来たとき、仲よく生活することができるのか、とても不安になってしまう。

図20　日本での外国接触

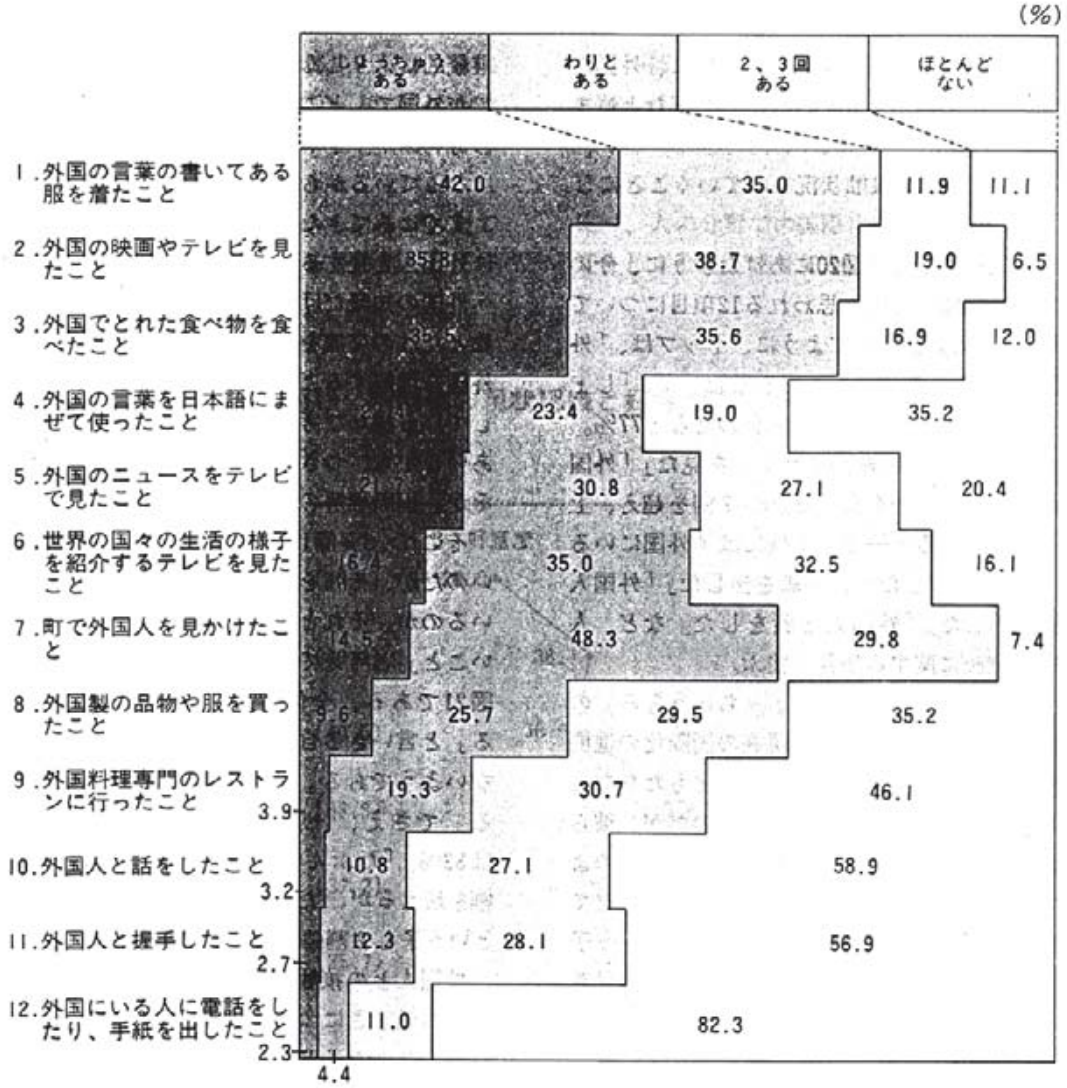
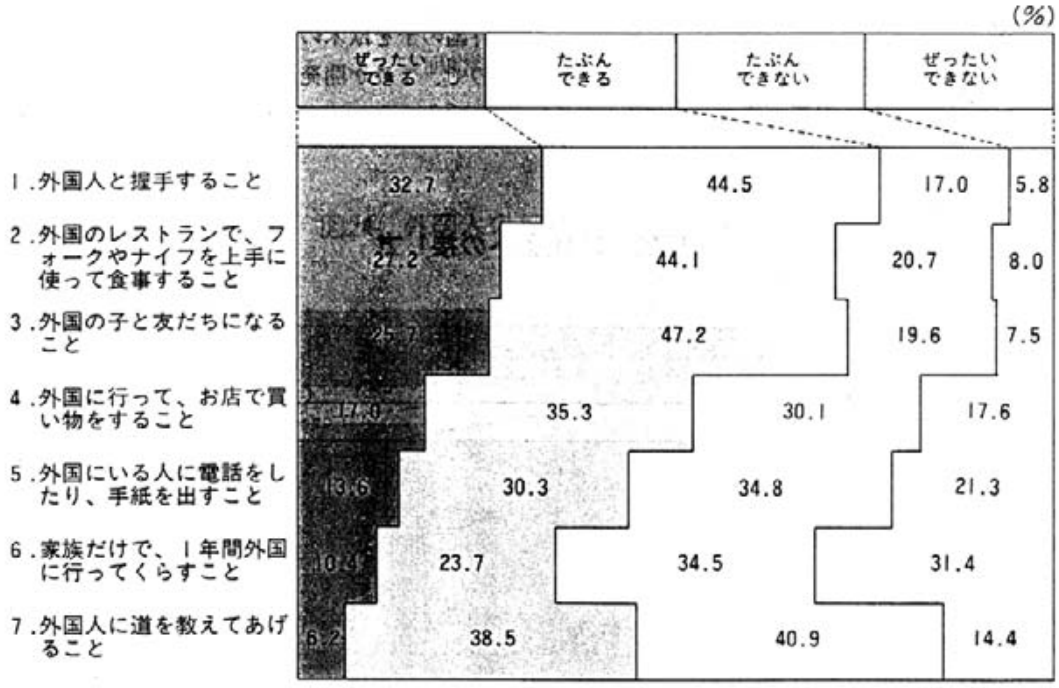


図21　外国人接触への自信



外国の子どもへの接し方

子どもたちの外国人の接触の少なさとその自信の乏しさに不安が残るので、外国の子どもへの接し方について、さらに考察をすすめていきたい。

図22では、クラスに転校生が来た場合を想定してもらい、その人とどれくらい仲よくしたいかを答えてもらった。日本国内からの転校生についての仲よくしたい気持ちはほとんど差がないが、外国からの帰国子女、外国の子となるにしたがって、仲よくしたい気持ちが低くなっている。外国の子の場合、「仲よくしたくない」という子も12%いる。「どちらともいえない」も合わせると、3割を超える。

また**図23**をみると、自分の知っている子が、外国の子と友だちになったらいやだという子が、1割強いる。特に、それが仲よしの友だちの場合、4人に1人の子はいやだと答えている。

もう少し、外国人転校生との接し方についてのデータをみていこう。子どもたちは、外国人転校生に「どんなことをしてあげたい」と思っているのだろうか、また「どんなことをしてもらいたい」と思っているのだろう。次の**図24**から明らかなように、外国事情や外国の言葉を教えてもらったり、逆に、学校を案内してあげたり、日本の言葉を教えてあげたりしたいと思っている子は8割前後いる。表面的な交流に対しては、かなり高い数値を示している。しかし、それ以上はあまり深くつきあいたくないようで、「宿題を忘れたら見せてあげたり」「マンガ本やファミコンを

貸してあげる」ような親しい関係になることを望んでいない子が多い。

こうみてくると、日本の子どもが外国人の子をどう見ているかが明らかになってきたように思う。つまり、「外国の子」であるという「色めがね」で見る子の存在と、仲よしになりたいと言いながらも、それは表面的な交流で、絆の強い仲間関係までは望んでいないということである。子どもたちは、ここでの外国の子を欧米の先進国の子と想定しているので、これが開発途上国の子だったら、もっと「色めがね」で見るのではないかという危

図22　転校生への接し方

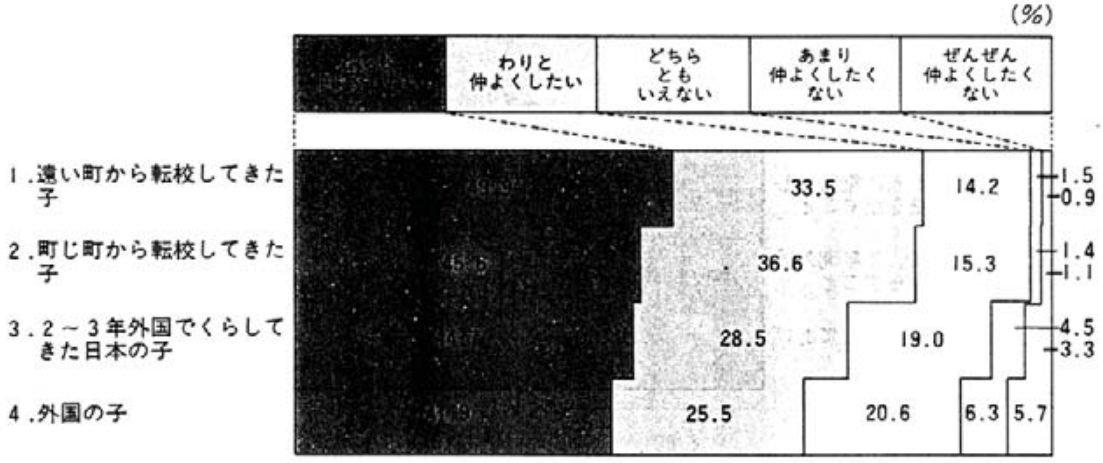
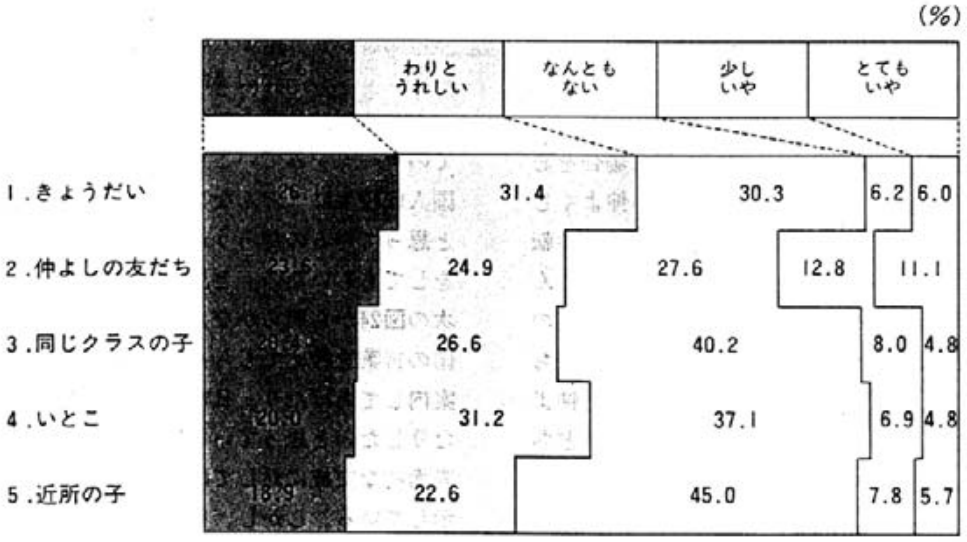


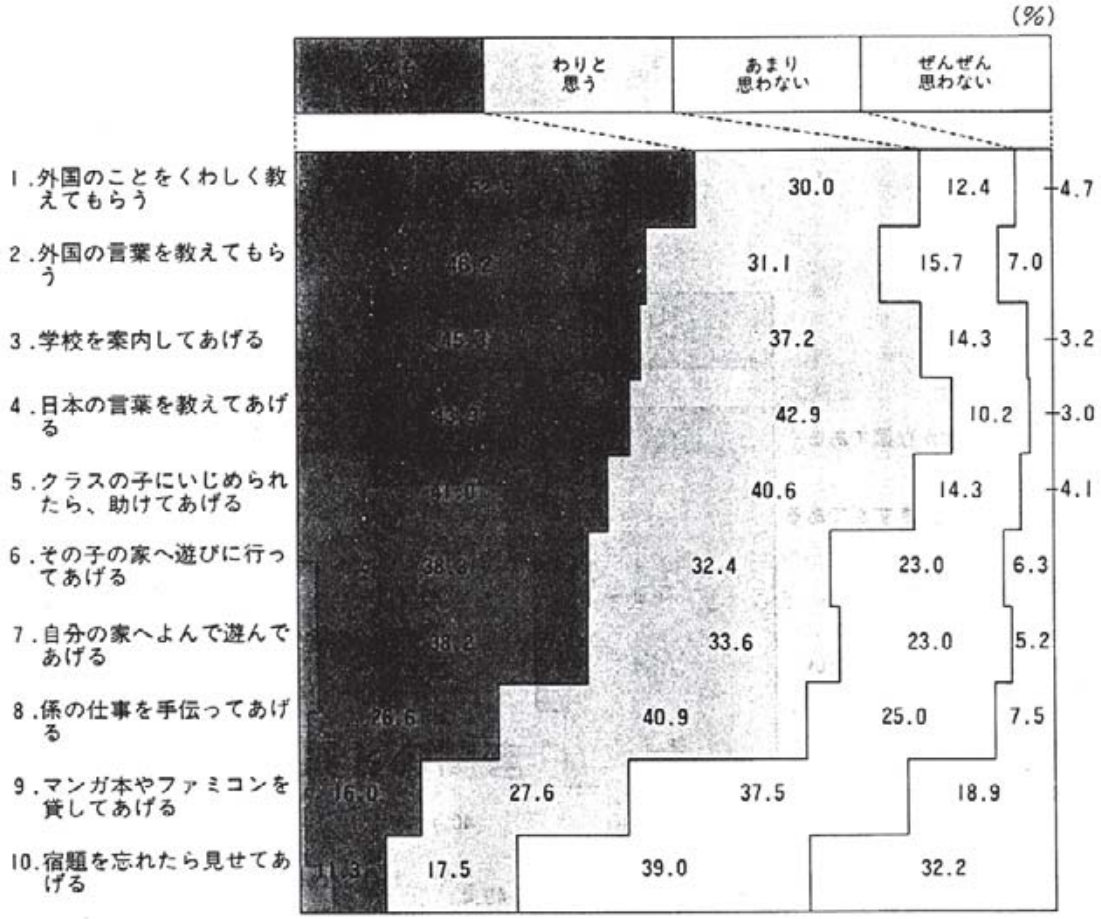
図23　知っている子が外国の子と仲よしになったとき



惧を感じる。

自分が外国でくらすことになったとき、その国の人々から「外国人」という色めがねで見られ、手をさしのべても握手もしてもらえず、彼らとのコミュニケーションも表面的なものだけだったとしたら……、とてもそれ以上は考えたくないという気持ちになってしまう。ここでは、日本の子どもたちの"人"という面での外国接触の不足と国際理解度の低さを指摘しておきたい。

図24　外国人の転校生との接し方

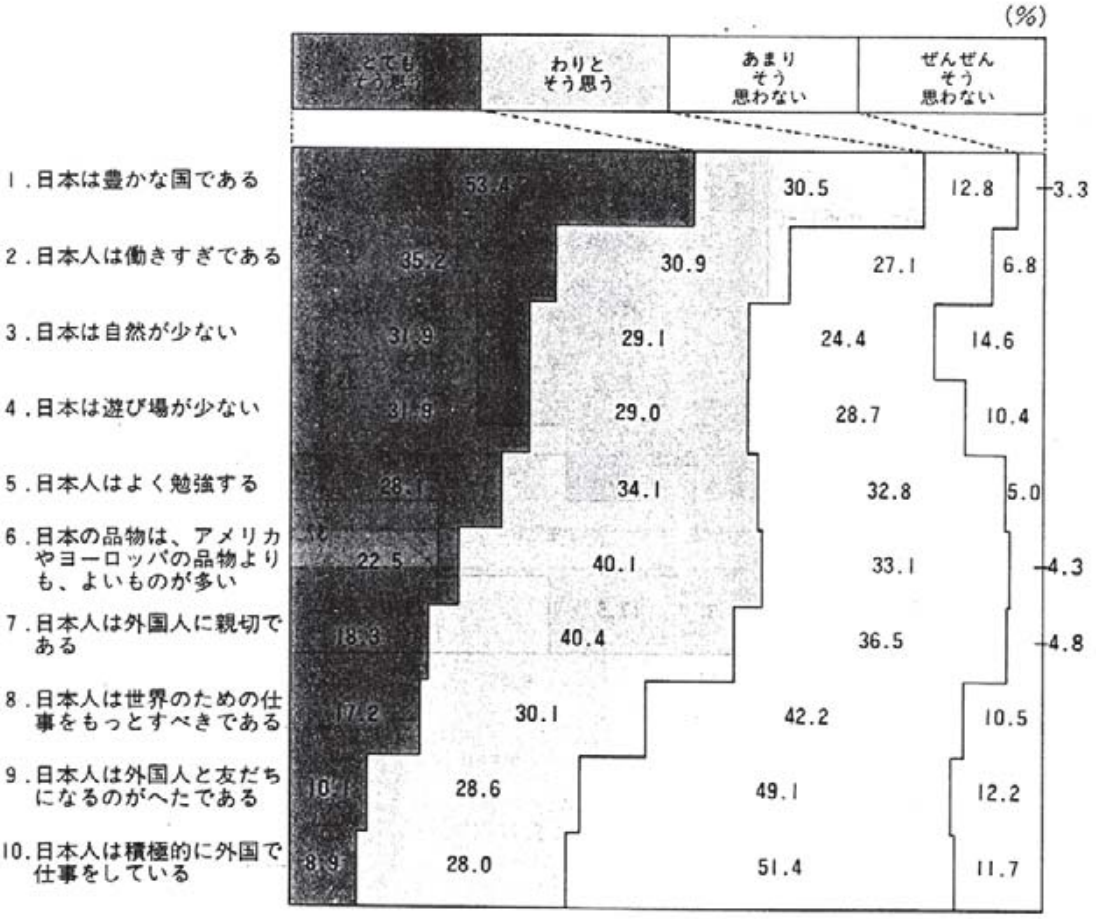


日本に対する評価

本章では、いろいろな角度から日本の国際化に対する子どもの理解を探ってきたが、最後に、自国についてどのように認識しているのか考えてみたい。

ここでは、日本人、日本社会をどのようにみているかを尋ねた。図25をみると、「日本は豊かな国」だという評価が断然トップで、「日本人は働きすぎ」「自然や遊び場が少ない」という意見が続く。日本人の世界に対する姿勢については、「積極的に外国で仕事をしている」と思う子は37%、「世界のための仕事をもっとすべき」という子は47%ほどいるが、「とてもそう思う」の割合は1割前後と低い。「世界の中の日本の役割」の重要性を、大部分の子は理解できていないようである。

図25　日本に対する評価



4. 外国接触と国際理解

これまで、子どもの外国イメージや国際化のすすむ日本に対するメンタリティと、そこに存在する問題点を探ってきた。ここではもう一歩進めて、子どもの国際理解を深めるためにはどうしたらよいのかを考えてみることにしよう。

国際化進展との関連

筆者が外国への認識を深めたのは、やはり外国へ行ったときだった。同じ景色でも、ブラウン管を通して見るのと、自分の目で見るのとでは全く違い、ちょっとしたカルチャーショックを受けた。子どもたちの国際理解を深める最も有効な方法は、外国の家庭にホームステイさせることかもしれない。しかし、それはどの家庭でもすぐにできることではない。日本で国際理解を深めるとなると、日本での外国接触が大きな影響を持ちそうな感触を受ける。

そのことを確かめるために、日本での外国接触量を**資料1**のような方法で算出し、他のデータとクロスさせてみた。

図26は、外国志向と外国接触との関連をみたものである。やはり接触量の影響は大きく、接触量の多い子ほど英語を習ったり、外国に行ってみたいという気持ちが強かった。

表2では、外国の知識との関連を成績と外国接触の両面から考えてみた。表から明らかなように、「日本は、外国からいろいろな食べ物を買っています」以下の10項目全てで、勉

強の得意な子よりも、外国接触量の多い子のほうが正答率がよかった。外国への気持ちだけでなく、客観的な外国知識においても接触量の影響は大きかった。

さらに図27、図28では、日本の国際化の現状認識と国際化への好意度と外国接触の関連をみたが、やはりどの項目でも接触量の多い子ほど国際化の進展を認識し、好意を示していた。特に、国際化の進展面で、接触量の違いによる認識の差が著しかった。

資料1　日本での外国接触量算出の方法

図20　日本での外国接触で紹介した12項目について以下のように点数化し、加算点を算出する。

1.外国の言葉の書いてある服を着たこと
⋮
12.外国にいる人に電話をしたり、手紙を出したこと

しょっちゅうある 1点 ―― わりとある 2点 ―― 2、3回ある 3点 ―― ほとんどない 4点

接触量多い	接触量中くらい	接触量少ない
12～24点	25～36点	37～48点
10.9%	61.5%	27.6%

図26　外国志向×日本での外国接触

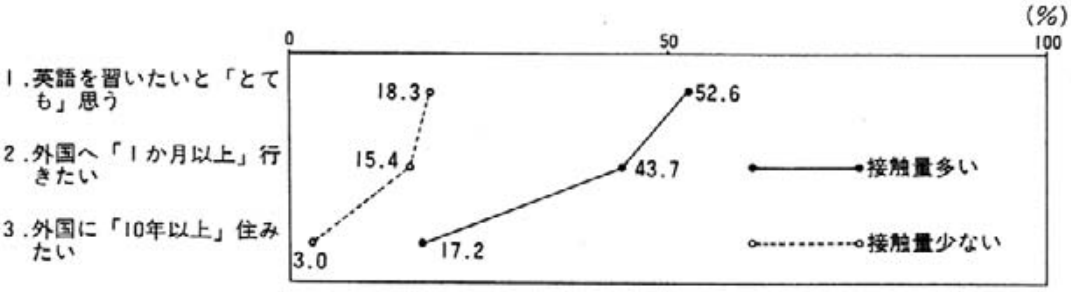


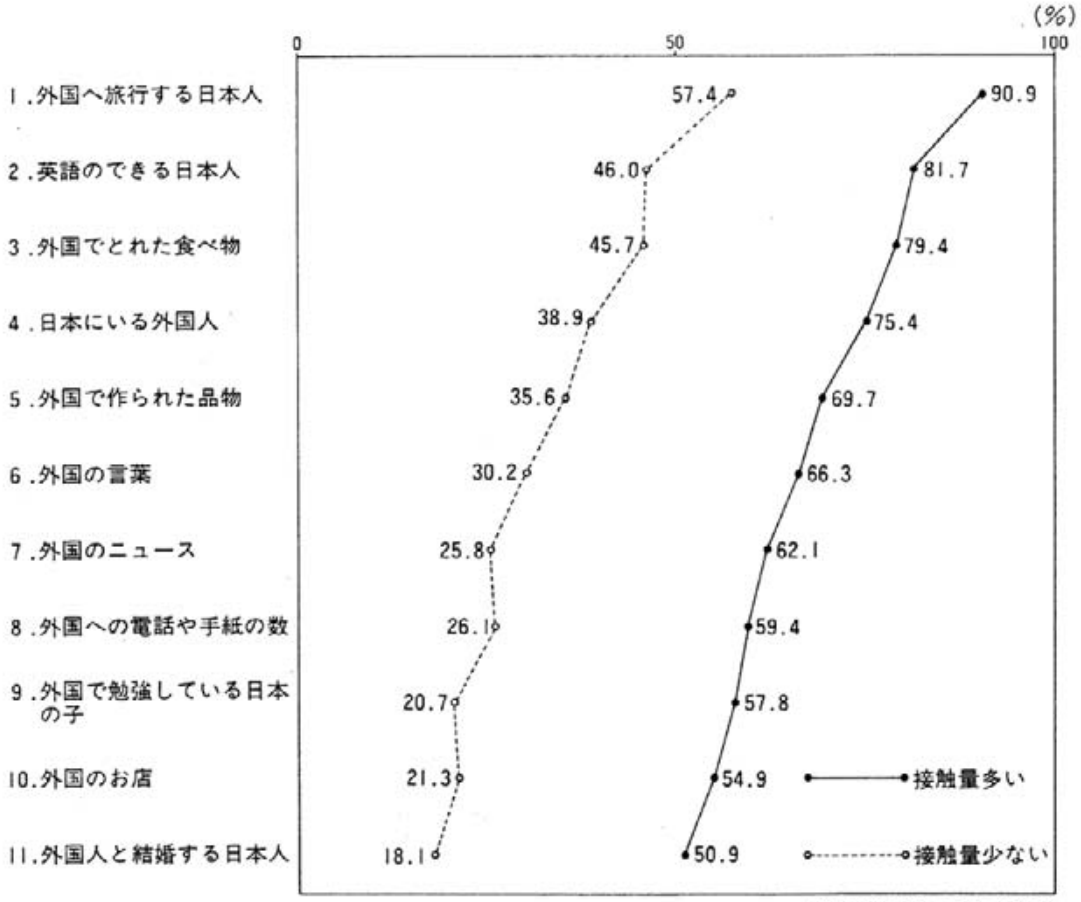
表2　子どもの外国知識(正答率)×成績・接触体験

(%)

調査問題(児童体験の数値は低い外国知識)	全体	勉強がとても得意		外国との接触が多い
1.日本は、外国からいろいろな食べ物を買っています	87.8	89.2		91.9
2.世界の中には、食べ物が不足し、たくさんの人がうえ死にする国があります	87.8	88.9		92.0
3.10年前に比べ、外国で働く日本人の数はふえました	86.8	85.9	<	92.5
4.食べ物や服がなくて困っている外国の人を助けるために、働いている日本人がいます	82.5	82.9	<	87.9
5.今、世界は平和で、戦争をしている国はありません	80.9	86.0	<	92.0
6.自動車は、どこの国でも日本と同じように、道の左側を進みます	80.0	79.4	<	85.0
7.日本は、外国にテレビや自動車などを売っています	77.3	79.4	<	89.7
8.今年の夏は、「韓国」でオリンピックが開かれます	71.2	74.5		75.6
9.カレーライスは、世界中の子どもたちが、一番好きな食べ物です	64.8	66.1	<	73.4
10.世界のどこの国でも、春、夏、秋、冬の季節があります	56.4	58.2		59.0

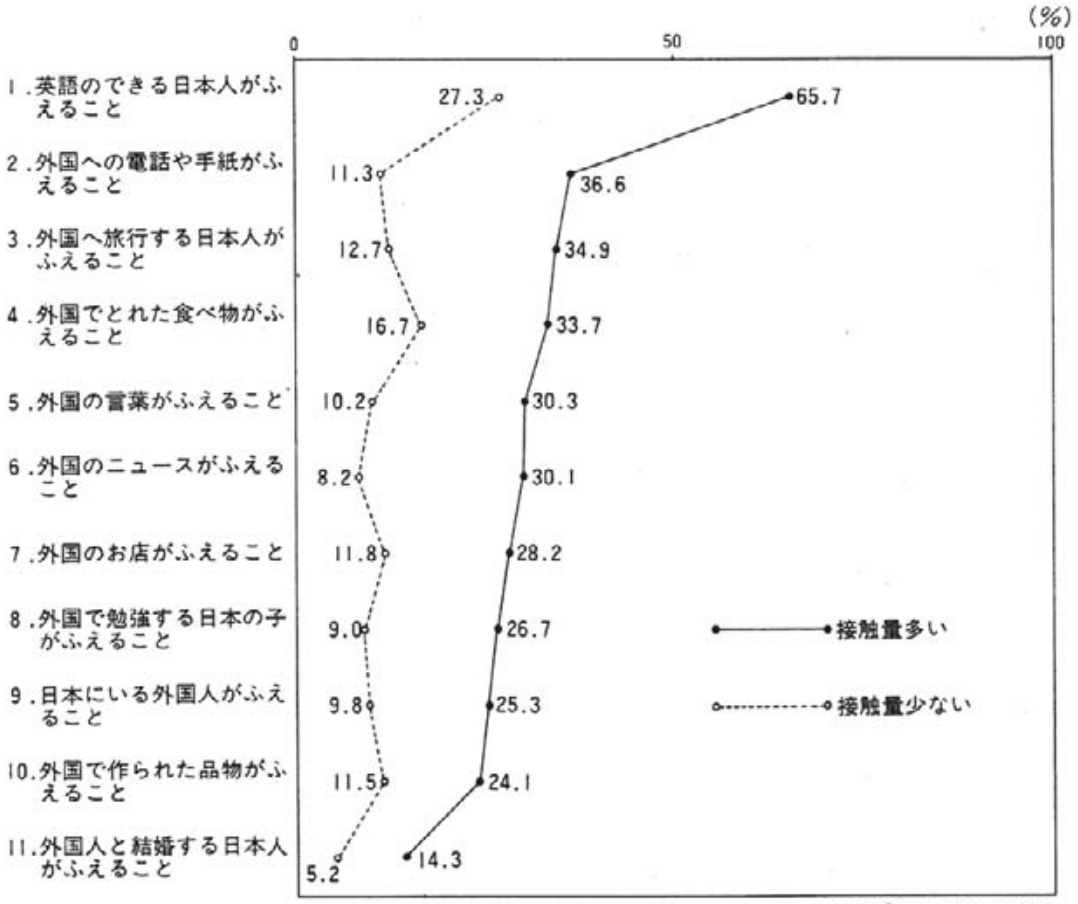
不等号は5%を単位として差を表す

図27　国際化の現状認識と日本での外国接触



数値は「とてもふえた」の割合

図28　国際化への好意度×日本での外国接触



数値は「とてもよい」の割合

外国人の接し方との関連

次に、外国人の接し方との関連をみてみよう。日常での外国接触が、外国志向や外国知識、国際化の現状認識に影響を与えるものなら、外国人との接し方にもかかわりがあると考えられる。

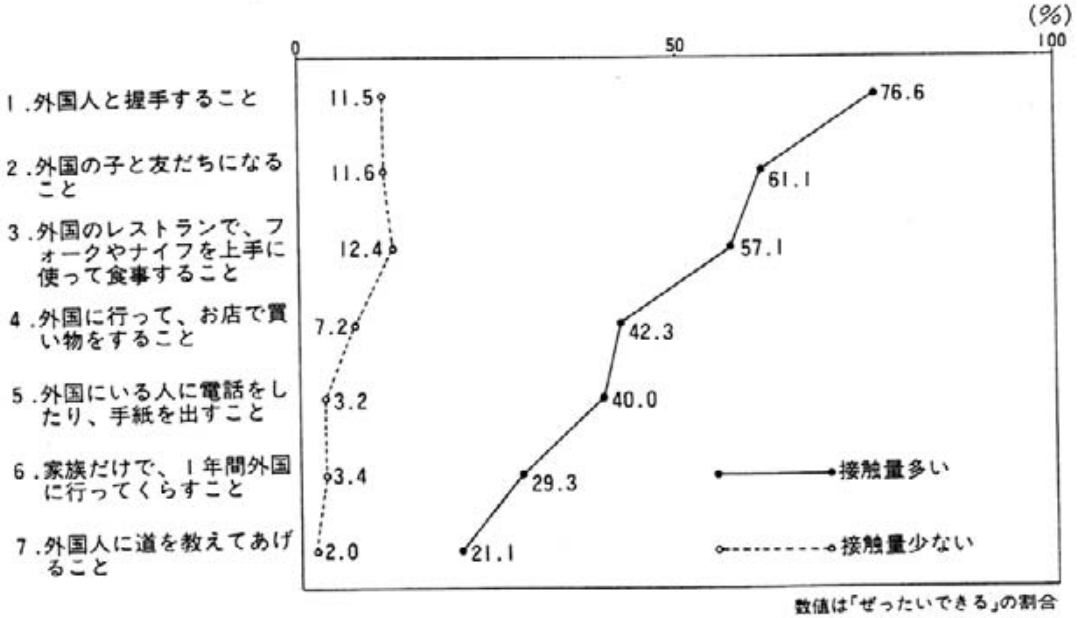
まず、図29で外国人接触への自信との関連をみてみた。どの項目も20%～60%もの大きな開きがあり、外国接触が多ければ外国人との交流において「ぜったいできる」という強い自信を持てることがわかった。

外国人転校生への接し方でも同様に、接触量の多い子のほうが積極的に交流を求め、絆の強い人間関係を持とうとしていることが、図30からわかる。

「町で外国人を見かけた」「外国人と話をしたこと」などの日常の外国接触が、子どもの国際理解を深めるうえで、大きな影響を持つことが、データの上でも改めて実感されたように思う。外国接触の中でも、特に"人"との接触が、子どもたちの国際理解に大きなウエイトを占めているようである。

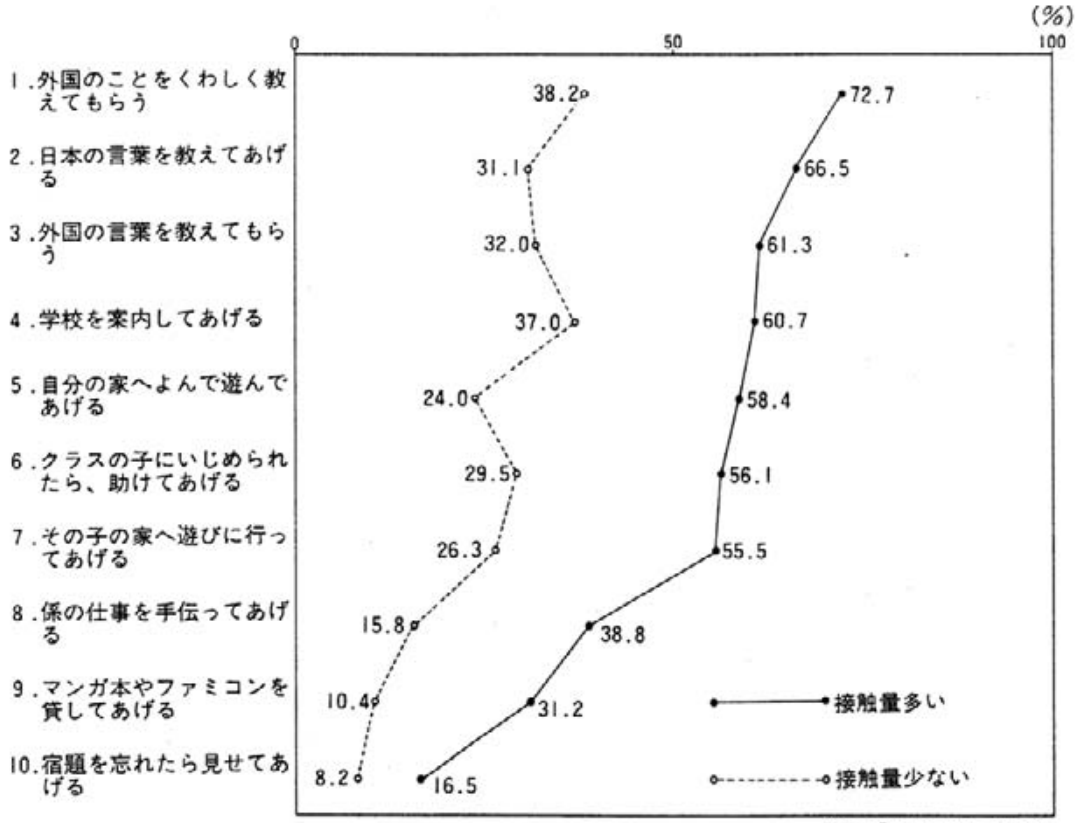
ただ気をつけなくてはいけないのは、前章でも指摘したように、日本文化と外国文化が混沌としている現況において、私たち日本人自身がしっかりとしたアイデンティティを持っていなければいけないということである。外国接触を意識しないくらいになったほうが国際化だという人もいるかもしれないが、国際化と同一化は違う。他とは異なったもの同士が、その独自性を認めあい、互いに心と心の結びつきを深めていくのが国際理解の基本姿勢であると思う。

図29　外国人接触への自信×日本での外国接触



数値は「ぜったいできる」の割合

図30　外国人の転校生への接し方×日本での外国接触



数値は「とても思う」の割合

まとめに代えて

21世紀に向けての教育のねらいとして、「世界の中の日本人」ということが重視されている。日本人が国際社会において、真に信頼され、日本の役割を果たしていくために、広い国際的視野に立った教育が求められている。

これまでふれてきたように、子どもたちはテレビや書物などから外国についての知識を得、様々なイメージをふくらませている。しかしその知識は断片的であり、不確実であることも少なくない。そのような中で、日常、人・物・情報などで外国との接触が多い子ほど日本の国際化の進展を好ましく思い、外国への理解が深く、外国人に対しても開放的な姿勢を示していた。

本レポートの最後に、外国接触の多い子のプロフィールを紹介して、まとめに代えたいと思う。

外国との接触の場を学校が用意することも必要だが、自分からすすんで外国と接触する子を育てる必要もある。そこで、外国接触の多い子のプロフィールに迫ってみたのが、図31である。

ここでは、外国接触の多い子と少ない子の差の大きい順に整理してある。図から明らかなように、外国接触の多い子の一番の特徴は、「父母と離れて〝何回〟も旅行やキャンプに行ったことがある」である。二番目に「〝とても〟明るい」、そして三番目に「スポーツが〝とても〟得意」である。確かにこのような子なら、外国に行ってもなんとかくらす生活力がありそうだし、外国人ともうまくやっていけそうである。

この結果をみながら、5～6年前にハワイで行われたサマースクールのことを思い出した。そこで筆者は、初めて外国に行く4年生10数人の指導をまかされた。日本各地から集まり、初めて出会った子どもたちの中に、某国立大附属小のA君がいた。彼は成績優秀で、英語も習っているという。何の迷いもなく、筆者はA君をリーダーにした。しかし、彼はハワイでは全く活躍できなかった。ハワイに着くまでは自信満々だったが、ハワイで自分の英語が全く通用しないとわかったとき、彼は自信を失い、何をするにも仲間の後を追っているという状態だった。

ハワイに着いて、俄然リーダー性を発揮しはじめたのはB君だった。明るく、ひょうきんで、今にもテレビのお笑い番組に登場しそうな子で、筆者は内心、不安に思っていた子だったが、ハワイに着くや常にグループの先頭にいて、英語もできないのに、手あたりしだいに「ハロー、ハロー」と話しかけてしまう。

ハンバーガーショップで一番早く買い物をしたのも彼だった。後で聞くと海外の一人旅は初めてだが、国内ではボーイスカウトでずいぶんいろいろな所に行っていたらしい。

そんなB君のことを思うと、今、学校では国際理解教育の重要性が声高に叫ばれているが、机上で外国知識だけをつめこもうとせず、実際に外国の文化・物・人と触れ合う機会を、まず学校教育の中に取り入れてほしいと思う。また、肌の色や言葉、生活習慣は違っても、同じ世界の隣人として認めあい、互いの心と心を結びつけていける子を育てるためには、子どもたち一人一人の個性を認め、1つの型にはめない教育が大切なことを強く感じた。

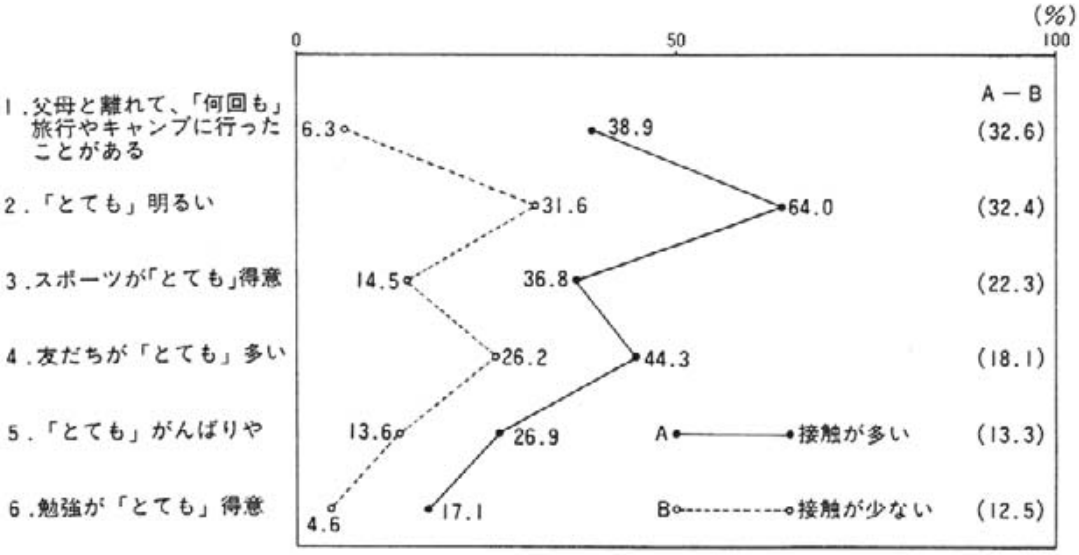



図31　外国接触の多い子のプロフィール